

# 死にたがり少年と幻想郷

そーだぜりー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

少年は気づいた、人の命の短さを。だから僕は願った、大切な人の死んだ姿を見ることが無くなることを。

これは父親に殺された少年の物語。by 平和章

そして、少年が消した記憶をたどる物語。by 惨章

文章力0、誤字脱字の連続、東方初心者、というダメダメづくしの作者でもよかったら、どうぞよろしく願います。それと、作者への感想という名の活力をください、願います。

小説家になろうさんでも投稿していますので、そちらもぜひよろしく願います。

## 目次

プロローグ		
プロローグ	幼い僕と非情な神様	1
プロローグ	ドア越しの少女と金平糖	4
プロローグ	忘れない言葉と消えない事実	7
プロローグ	悲しみと意外な最後	11
第『平和』章		
十話投稿記念	ツグナイナオヤと日常回1	15
第一章	第一話 迷える僕と起きない彼女	21
第一章	第二話 気まずい僕と罪償い	24
第一章	第三話 涙の無駄遣いと右肩	27
第一章	第四話 炎の弾と目的地	30
第一章	第五話 チキンな僕と月	33
第一章	第六話 五の後のはなしと喪服の事	37
第一章	第七話 ツグナイとナオト	40
第一章	第八話 殺し合いと崩れゆく意識の中で	45
第一章	第九話 「イジヨウナ死への願望」	48
第一章	第10話 「少年から…」	52
第一章	11話「再会后…」	57
間の物語		
章まとめ的な説明回		60
もしもツグナイ君が紅魔館スタートだったら	一滴目	62
もしもツグナイ君が紅魔館スタートだったら	二滴目	65
ぶれいくたいむ	1	69

## 第惨章

第三章 第一話 「聞きたくないと失敗作」	71
第三章 第二話 「サツカーと銃それに」	74
第三章 第三話 「霊夢とスキマ」	78
記念回	
ただのはつちやけ回	81
とーじょーじんぶつしよーかい (登場人物紹介)	ver 2
死にたがり少年と幻想卿 (リメイク版)	87

## プロローグ プロローグ 幼い僕と非情な神様

ある日、少年は気づいた。人の命の短さを。  
理由はある。それは少年の友達が病気で死んだのだ。その日、少年はかなり泣き喚いた。

泣いた。その時の記憶が消えるほど泣き喚いた。喉がかれるほど泣いた。気絶するほど泣いた。

だから少年、もとい僕は願った。もう大切な人の死んだすがたを見ないことを。

それで結果から言うと、願いは叶った。

8歳になってすぐに僕は死んだ。父親に殺されたのが理由だったはずだ。他人が僕の父親を見たらちよつと、いやかなりおかしいと思うだろう。

昔から僕の父親は僕のことを虐めるのが好きだった。いや、これも間違いか。

好きではない、ただのストレスの発散運動だったんだと思う。僕は仕方ないんだと、大人の事情というやつなんだと理解した。

そしてついさつき僕は殺された。父親の手で。  
身体中を浅く切りつけ、そのあと腹を刺して、刺したその腹に指を突っ込んで遊んでたなあ。まあそのあと、首を絞めて殺してくれた。

父親がこの生き地獄から助けてくれたんだ。

そのはずなのに、そのはずなのに僕はまだ立っている。知らない土地の、知らない森の地面を踏みしめている。

まだ、神様は僕を殺してくれないようだ。

そして、僕はあてもなく森を歩き始めた。

「君は本当に惨めな子だね」

そう言つて、彼は僕に話しかける。僕の髪を掴んで。

「君は本当に悲しい子だね」

そう言つて、彼は僕に話しかける。僕のお腹を殴つて。

「だから、君を殺してあげるよ」

そう言つて、彼は僕の首に包丁をあてた。

すると、彼はニヤリと笑う。

「いつかね」

そう言い残すと、彼は包丁を持つ反対の手にある注射器を、僕の腕に刺す。すぐに、親指で押子を押し込む。針から薬品が体内にはいつてくる。

「うあああああああああああああ!!!」

身体に強烈な痛みがはしる。

次第に痛いことしか考えられなくなつてくる。

痛い

痛い痛い痛い

痛い

あ

それを最後に僕の意識は途絶えた。

これは夢だ。

間違いない、と断言できるほど明確にそう思えた。理由はわからない。ただ、脳がそう押し付けるような、そんな感じだった。

でも、夢の中で夢を見るとは不思議なものだな。しかし、夢心地は最悪だった。

なぜなら、あれは僕の過去だ。父親に虐められた時、一度だけ薬品を打たれたことがあった。そのせいで僕は錠剤などが飲めなくなつた。

さて、どうやったら起きれるのだろうか。

「このドアを開ければ起きれるわよ」

いきなりドアの向こうから、女の子の声が聞こえてきた。

「ほら、現実に戻りたいんでしょ、なら早く開けなさいよ」

誰だこいつ。反応が遅れたが、こんなやつとは夢の中では会ったことがない。

まあいいや、起きれば問題ないし。

「いやいやいや、良くないわよ、聞きなさいよ。聞かれるの待ってた私が恥ずかし」

言っているのを無視して僕はドアを開けた。

## プロローグ ドア越しの少女と金平糖

ここに来て一週間たった。

ここが幻想郷という場所であり、元いた世界ではないことがわかった。

今は、小さな小屋を借りて生活している。

なんか、小さな子供が一人暮らしをするととなると、里の長からお金がもらえるという、嬉しい特典があった。

たった4日だが、充実した1日1日を過ごしている。今日は小屋で、ゴロゴロしていようと考えていた。

しかし、その計画はある人のせいで崩れるのだった。

「ほらー出て来なさい!!一緒に寺子屋にいきましょう!!」

最近、というか三日前からつきまとってくる少女の声が、小屋の扉越しに聞こえた。

つきまとってくる理由は至極簡単で、寺子屋の先生に連れてくるよう頼まれているらしい。もちろん、僕は行く気も無いし、勉強なんていらなと思うっている。

自分で言うのもなんだが、僕は普通の人よりは頭がいいと思っている。

理由は、昔父親に「一週間で一学期の勉強を覚えろ」という無理難題を強いられ、結果覚えられた。この時僕は思った、人間脅されてやればなんだってできるのだ、と

その結果、勉強系での無茶振りが多くなり、最終的に中学生の範囲まで手を出してしまった。(具体的に言うと中二の前半の範囲全部)

僕が元の世界の自分の環境のことについて思い起こしている  
と、「ちよつと聞いている?」と少女が聞いてた。

「ん? ああ、ごめんごめん聞いてます。続きをどうぞ。」

「? とにかく寺子屋に見学でもいいから来てよ!!」

「(父親のことを思い出しすから)僕は行きたくない」

「それだどけーね先生が怒っちゃう」



「じゃあ、そのけーね先生にも言っておいてよ、行かないって」  
「それだとけーね先生がここに来ちゃう」

「けーね先生がここに来るとどうなるの？」

まさか、扉を強引に開けて連れ出すとかか？いや、それはないか。

ちゃんとした大人の先生だったら、そんなことはしないだろうな。

そんなことを考えていると、少女が少し震えた声でけーね先生のことについて語る。

「ここに来たら」「来たら？」「強引に扉を開けて……」

おいおい、予想どおりの展か「君が白眼を剥いて気絶するほどの頭突きが、君の頭におちるよ」

全然予想どうりの展開じゃない。直角90度真上を歩きました。

なにそれ、僕の父親でもしてないことだよ。てかそれ、元の世界だったら犯罪じゃん。

そんなことを聞いた僕は、多分新たな恐怖でかなり顔を青くしていただろう。

ちなみに、少女が語ったことはハッターで、それにまんまとハマる僕に笑いをこらえていた。

「わ、わかった。見学だけでも行こう」

「本当!? やったあ!! これで金平糖がもらえる!! ありがとう!!」

なんと、少女は金平糖でつられていただった。

少し僕は、むなしくなった。

「じゃあ、明日また来るから。また明日!!」

「うん、明日」

先程の虚しさから一転、少し嬉しかった。

あまり学校に馴染めず、クラスで空気と化していた僕には『また明日』と言ひ合える友達が居なかったからだと思う。

『また明日』と耳で木霊する。

「また明日、ねえ」

ふふ、と少し笑ってみた。  
でもあとでわかったんだ。  
この『また明日』が来ないことを。  
そして思い出すんだ。  
大切な人がいなくなる恐怖を。

## プロローグ

## 忘れない言葉と消えない事実

「妖怪が来たぞおお!!逃げろおお!!」

そんな野太い男の声で僕は飛び起きた。

妖怪が来た?まじで居たのかよ!!、とそんな感じのことを心の中で呟きながら、僕は寝間着のまま勢いよくドアを開ける。

すると、地獄のような光景が目を見た。

「なんだよこれ!!」

もえる家々、大量の男の死体、死体は内臓が口から出ていたり、顔が踏み潰されていたりと様々だった。

吐き気はしなかった。死体を見るのに慣れていたこともあるが、それより顔を知っている人が何人かいたからだ。

そのせいで、怒りと空虚感が身体を支配していた。

「ぎやああああああ!!」

「ツッ!!」

地獄のような光景に立ち尽くしていると、甲高い女の子の悲鳴が町に響いた。

その声で僕は我を取り戻した。

悲鳴が聞こえた方をみると、小さな女の子が妖怪に追い詰められていた。たぶん、あの不細工な姿見るに弱い方だろう（外見で判断）。

すると、僕の頭にあの父親の声がよぎった。

『君は強い。僕のいじめにこうやって耐えているんだから。だから、僕以外のやつを殺していいよ。僕がその許可を出そう。ただし、それは女の子とか、老人とか、まあ、自分より弱いやつらを助ける時だけにしよう。約束を破ったら死ぬ事より辛いことをしてあげるよ。頭がいい君ならわかるよね。ああ、お置きする日が楽しみだなあ。ねえ、逆に破ってよ。お願い、ねえお願い……』

最後なんか台無しにしていくれているような気がしないでもないが。

まあ、今動く理由を作るには十分すぎる言葉だった。

僕はすぐにそこにあつた刀を手にとつた。

刀の柄を力強く握る。握つた手から汗が吹き出た。

僕は足音をできる限り足音を消して、妖怪の背中に向かつて走つた。

そして、妖怪の背中に切先を向ける。

妖怪との距離はかなり近い、気づかれたら僕も彼女も死ぬだろう。

だから、気づかれる前に、

「死ね」

殺す

「☆+☆—☆+ + + ☆ + % — ☆ ÷ % + % ☆ ☆ !!!」

「今気づいたっておせーよ」

妖怪は僕が刺す前に発した声に反応したが、振り向く前背中を刺した。

叫ぶ妖怪の背中に刺さっている刀を、横にねじって引き抜く。

すると、妖怪から大量の赤い血が吹き出る。

「じゃあな」

僕は最後に、前かがみに倒れる妖怪に言葉吐いて、女の子へ近寄つた。

「大丈夫？立てる？」

彼女は首を横に振つた。だめだ、完全に目が怯えきっている。

そこで僕は閃いた。

「そうだ」と僕はポケットの中から飴を手にとつた。

しかし、これはただの飴じゃない。

これは、外の世界の飴だ。銀色の小さい袋を彼女に差し出す。

「これは飴だよ。よかつたらこれあげるよ」

そんなことを僕が言うのと、彼女は震える手で飴の入っている袋を手にとつた。

彼女はその袋を破くと、すぐさまその中の飴を口に入れた。すると、彼女は頬緩めて言った。

「おいしい」

僕はそんな彼女の言葉を聞くと、少し微笑み彼女の手を取った。

「少し走るよ」

「うん!!」

元気がいい返事を聞いて僕は走った。

そのあとは順調に逃げ切った。

妖怪に出くわすことなく女の子を避難場所に送った。

しかし僕の不安は消えなかった。

なぜなら、

「いない……。あの　少女　がいない」

そう、『名の知らないあの少女』がどこにもいないのだ。

避難してきた里の人にも聞いたが、『知らない』と返答は全て同じだった。

そんな僕にある事が頭によぎった。

もしかしたら、と

「行かなきゃ……」

そして、僕は妖怪たちが今も暴れ続けている里へ向かった。

「なんでいないんだよ。なあ、どこにいるんだよ」

僕は呟きながら、今も焼け続けている里をさまよう。

そんな僕は、右手に引きずりながら持っている刀しか持っていないなかった。

そう、僕は刀『しか』持っていないなかった。

「ああ、あああ、あああああああああああああああツツ

!!

嘆いた。この世の理不尽を、

僕の抱える不幸を。

そして、人の死を。

「ああああああああああああああああああツツ!!ハハツ!!もういいや、疲れた。死んで終わろう」

そして、僕は右手の刀で首を「させないわよ」刺せなかった。「ツツ!!誰だお前!!」

いきなり、自殺行為を邪魔をされた挙句に、腹を蹴り飛ばされた僕。

「自殺なんてしないで手伝いなさいよ。まったく、こっちは妖怪を倒すのに忙しくて猫の手を借りたっていうのに」

そいつは、紅と白の肩や脇などが露出している独特の巫女服を着ていて、黒い髪で、紅のリボンをつけている少女だった。

彼女が愚痴を垂らしていると、正面から妖怪が現れた。

「ほら来た。ちよつと手伝いなさいよ」

「いやいや。戦ったことないんですけど」

彼女が呆れたように言った。

「そんな、身体中真っ赤にして、しかも、物騒なもの握ってたら、ねえ?」

まさしく彼女の言う通りだった。

そして、僕はまた刀を力強く握った。

「まだ、使える刀がたくさん転がってるんだから、適当に振り回してればいいわよ」

「死んだら責任持てよ」

「嫌よ、そんなもの」

「そんな身勝手なツツ!!」

その言葉を最後にして、僕は妖怪たちの群れに突っ込んでいった。

## プロローグ 悲しみと意外な最後

「まったく。だから、そんなところに引きこもってないで、はやく出てきなさいよ」

これは夢だ。というか、またここに来てしまったようだ。

幻想郷に来て以来、この空間には来ていなかった。まあ、幻想郷に来てすぐに色々忙しかったので、この空間のことは完全に忘れていたのだが。

前回、僕から話しかけられなかつたから、今回こそ自分から話しかけてみた。

「ええと、久しぶりだな」

「そうね。まあ、せいぜい一週間会ってないだけだけどね」

一週間？ けっこうな日数だと思うのは、ぼくだけだろうか。そういうば、こいつ…

そんなこと思い、ためしに今思い浮かんだ疑問を彼女に聞いてみることにした。

僕は、ドアの前できちんとしてドアの向こうにいるだろう彼女に聞いた。

「なあ、お前っていつからここにいるの？」

彼女が答えやすいように、やんわりと聞いてみた。

すると、「ふふふ」と彼女がばかにするように笑った。

「あなた、なにも自分のことわかってないのね」

「僕が自分のことを？」

「そう。例えば、今あなた。『自分には何も残ってない』っておもってるでしょ」

そう、僕は今自分には何も残ってなはずだ。家も、友人も、帰る里も、俺の手のひらから零れ落ちたのだから。

だから『自分には何も残ってない』はずだ。

なのに、

なのに彼女は『残ってる』と言っているのだ。

それじゃあ僕に何が残ってるっていうんだ。

「残ってるじゃない」

彼女が語ると同時に、なにかが頭に入り込んだ気がした。

まだ、悲しみが」

語り終えた瞬間、視界が真っ黒に染まった。

／／／／／

「まだ寝てるの？」

そんな声で僕は目を覚ました。

身体がすこし重い気がする。

だから、布団から身体を起こそうとする。

すると、

「ツツ!!」

身体中に激しい痛みが走って、すこし唸った。

すると、勢いよくふすまが開き、紅と白の特徴的な巫女服の少女が

駆け寄ってきた。

「大丈夫!？」

巫女服の少女が心配そうに聞いてきた。

痛いのは父親のいじめでなれているが、やっぱり痛いのは嫌いだった。

しかし、巫女服の少女を心配させたくなつたので、すこし嘘をついた。

「大丈夫です。そんなに痛くないので」

そう僕が言うと、巫女服の少女がムツとした。

「嘘ね」

「うう…」

彼女の言うとうりだった。

痛みに慣れているとはいえ、これは限度を超えていた。

具体的には、ずっと身体焼かれ、そんななかで切られる感覚だ。身体を焼かれたこともあるから、すこし耐性ができていた。

「でも、大丈夫なのは本当です。だから」それも嘘よ」最後まで言



わせてください」

この人は僕のペースを崩してくるなあ。でも、なぜか恨めない人だ。それに、悪い人ではないようだ。

そんな事を考えていると、巫女服の少女は僕の身体を指差した。

「そんな身体になってよく言えるわね」

僕はそう言われ、自分の身体を見ると顔以外が包帯で埋まっていた。

「うわああ…… どうしてこうなったんですか僕の身体」

「どうもこうも、穴だらけになったのよ。血管から大量に血が出て来て、永琳のところへすぐに連れて行かなかったらどうなっていたか……」

そう言うと、彼女は顔をうつむかせた。かなり心配させたのだろう。

やはり、まだ自分が弱いからこの少女をこんなにさせたんだ。

まだ、僕が弱いから。

「とにかく、三日間は絶対安静。わかった？」

「はい、わかりました」

さて、生活費とか、どうしようかなあ…… 里の方もあんなつちやったし、特典ももうないだろうし。さて、この三日間をどう乗り切ろうか。雑草でも食っていこうかな。

など、色々と腹をくくっていると、少女の方から話しかけてきた。

「ねえ、ちよつと相談というか、まあ、あなたには損にあまりならない話があるのだけれど。ああ、あと敬語やめなさい。堅苦しいから」

「わかりま「敬語やめなさい」……わかった。んで、その話とやらはなに？」

巫女服の少女がニヤリと笑う。

そう、僕は少女の罠にひっかかったのだ。しかし、気付いた時は遅かった。

「あなたにやってもらいたいことがあるの」

この言葉が後に僕の人生を大きく捻じ曲げた言葉であり、僕の人  
生観を変えた言葉であり、

そして僕とこの少女の奇妙な生活の始まりのキツカケの言葉  
だった。

## 第『平和』章

### 十話投稿記念

### ツグナイナオヤと日常回1

「今日は天気がいいなあ」

僕が外に出て雲一つない、とは言い切れないぐらいの空を見た。

あの人里での騒動から2日たった。

人里は現在復興に力を入れている。少しずつだが、人里はもとの形に戻っている。

僕の体はまだ全快ではないが、家事や刀の扱いの練習とかには支障がないぐらいには回復した。

そして、前借りていた家はなぜか全焼していた。そう、跡形もなく。

ある人によると、燃えた。というより、爆発して吹き飛んだ。と言っていた。

確かに加熱性の高い物とかは貸家（というより物置小屋）だったからまだ置いてあったけど、それも大量ではない少しだった。それぐらいで高威力の粉塵爆発が起きるであろうか。

まあ、とにかく今は霊夢の住む博霊神社に住んでいる。そして、何でも屋的なこともやっている。という現状だ。

そして、今から朝ごはんを作ろうとしているところだった。とりあえず、霊夢を起こしに行く。

到着した、現在霊夢の部屋の前。

ドアの前で大声で言った。

「霊夢ー。朝ですよー」

霊夢を起こす。

「……………スピーー」(眠

コケ。

実際になった気がしたが、今の僕の心でそんな効果音があった。

「仕方ない先に(´)飯を作るか…」

そんなこんなで、朝食を作る。

すーぷーんぐ」

「よしできた」

ご飯と味噌汁という質素な感じになった。

まあ、材料が少なかったというのもあるが、実際はめんどくさかったのが強い。

「ご飯と味噌汁を運んでいると、

「あら、できたのね」

「……いつから居た」

「あなたが味噌を使い始めた頃から」

ちやぶ台に朝ごはんを置いて、お決まりの言葉を言う。

『いただきます』

電化製品なしで作ったはじめてのご飯は、意外とおいしかった。

「へえーナオヤってお兄さんいたんだ」

「まあね、諸事情ではなれて暮らしてたからずっとあつてないけど」

「どんな人だったの？」

「まあ、僕が今8歳だから、少なからず僕が6歳のときはかつこよかったよ。大切な人のためなら人を殺す、いや世界を消してでもやりとげるようなひとだったよ」

「なんかすごいわね……」

今はやることなくなったから、普通に喋っている。

暖かい気温で少し眠いが、喋る方が楽しいからそちらに集中する。

「そういえば、霊夢は友達とかいないの？」

「まあ、いるけど変なやつらばかりだよ。一人は魔法使いだし、また一人は妖怪だし」

なんだそりゃ、霊夢自体博霊の巫女なんていう危険な役やってるのに。

しかし、魔法使いか……いよいよ、なんでもアリだな幻想郷。

「そういうナオヤは外の世界に友達いるの？」

「いや、いなかった訳でもなかったが、過去形でいうなら『いた』  
「現在は?」

「死んだよ。理由は事故、事故原因は『僕』。つまり『もういいわ』  
うんわかった」

君の友達は、事故死だった。

その事実は覆らない。

この言葉は友達の両親に言われた言葉だった。

まあ、そのときの記憶は刷りきれてうまく思い出せないのだが。

「ねえツグナイ」

「ん?なに霊夢」

「今は友達欲しい?」

「……………」

迷った。

多分、また失うのが怖いのだろう。それこそ、心の底から。

思い出すのは昔失った、たった一人の友達。

そして、その子の死んだ顔。

また、自分は世界を呪うことになるのではないかと

また、失って傷つくのではないかと

「まあ、そんな重要なことでもないし今答えを出さなくてもいい  
わよ」

ああ、また気をつかわれてしまった。

自分が臆病なせいで気をつかわれてしまった。

やっぱり、まだ僕は過去をずるずると引きずっているのか?

いいやちがう、疑問形じゃない、この場合は、「引きずっているの  
だ」なんだ。

そうまだ、引きずっているんだ。過去を。

ずるずると、ずるずると、ずるずると。

「そんな引きずっているならすてればいいじゃない」

夢だ、なんだまた来たのか。

僕はドアの向こうにいるだろう彼女にいい放つ。

「お前、僕の心読むなよ。てか、そんな簡単に捨てれる物じゃないんだ」

「まあ、捨てるも捨てないも自分次第だしね。そんなことより、するといきなり、ドアがドンドンツツと叩かれる。

僕は少々ビクツツとする。しかたない、チキンなんだから。

彼女は少々怒ったように僕へ言った。

「そろそろ私もいれてくれない?」

「え、お前ここに入れるの!?!」

知らなかった。

だって、僕ここに望んでこれる訳じゃないし、そもそも僕でさえここがどういう所かわからないし。事実彼女の正体でさえ知らないわけだ。

しかし、ここで一つの疑問が浮かび上がる。

「どうやって入るの?」

「え? ドアを普通に開けるだけよ?」

「でも、前々回開けたら現実に戻ったじゃん」

「あれは、あなたが帰りたかって意識したからなったのよ」  
なるほど、要は意識のしようということか。

それじゃあ早速、

「開けるぞー」

「ふえ!?! ちよ、ちよっとままって」

ガチャリと、ドアらしい音がする。

そこには、

「は?」

昔死んだ友達の姿をした僕と同じ年ぐらいの少女がいた。

「はは、お前嫌がらせかよ」

「まあ、これには深い事情があるのよ」

まっとなにかく、と話を切った彼女は、いい放つ。

「私は神様よ」

「はあっ!?!」

だめだいきなり過ぎて追い付けない。

うん、だめだ一回死んでみよう。

そんなことをふとおもいつき近くにあった(何故)縄を手取る。

「なんであなたは縄を持っているの」

「止めるなよ神様」

天井に吊るして、

「別に止めないわよ

そして、椅子を台にして縄を掴み

だつてあなた

縄に首をかけて椅子を

自殺できないもん」

蹴り体か浮きながらも地に足がつかない状態になった。キユツ

と首がしまり呼吸が困難になる。

そして、それから三十秒で意識が消えた。

しかし、次の瞬間バチンツと音と共に意識が覚醒する。

「あ、起きた。おはよう首吊り君」

「ああ、おはよう。てか、なにこの状況」

現在僕は首が吊つてはいるが、呼吸ができているというよくわからん状況だった。

僕は縄を掴み首を浮かせて、首を引っ込めてそのまま落下した。

ドタンという音を鳴らし着地するが、僕は問いかける。

「僕の能力はなんなんだ？」

不敵に笑う少女。

そして答える。

「あなたの能力は

この能力は僕に似合ってはいるが悲しい能力だと思う。  
だつて、

自殺行為で力を増幅させる程度の能力だ!!」

僕は相手に殺されないと死ねないのだから。

「ああ、くそつたれが」  
僕は世界に吐き捨てた。



## 第一章

### 第一話

#### 迷える僕と起きない彼女

現在僕は、『迷いの竹林』というところにいるらしい。まわりを見回しても、あるのは竹竹竹。目が回ってきた。はあ、どうすれば永林がいる屋敷に着くのか。

「もう無理いい…」

と言いながら、僕は地面に倒れふした。

こんなことになった原因は、三時間前に遡る。

「さて、なにを作ろうか」

僕はそう言つて朝つぱらから博麗神社の台所の包丁を握る。

理由は至極簡単。

1, 自分が倒れた時に貸しを作ってしまったから。  
2, 住む家が燃えてなくなったから。

という以下の理由があり、博麗神社に住み込みのお手伝いの仕事をしている。

他にも自分で『なんでも屋』的なやつもやっている。

それで今は俺と霊夢の朝ごはんを作っていた。

この神社の巫女こと、博麗霊夢は朝8時だというのにいまだに寝ていた。おこそうとしたいのだが、女の子の部屋に入るのは抵抗があつて入りづらいのだった。だから、部屋の襖の前に立ち大声で起すのだが。

「おきろー!! 霊夢ー!!」

「……………」ぐうぐう… (眠り声)

「……………。いい加減起きておくれよ…」

仕方なく、僕は霊夢をおこすのを諦め、毎日の日課をこなしていく。

少年移動中…

博麗神社の石畳のところ

「はああああツツ!!」

僕は両手に握る刀を大きく振りかぶり、振り下ろす。ブオン、と風をきる音が鳴る。

刀は非常に軽かった。理由はわからなかったが、まあ使えればいいか、つていう感じで流した。というか、適当に最後に手に取った刀がすごい刀だったとか運がいいのかも。

そんなことを思いながら横薙ぎに刀を振るう。

こうやってあの事件から五日たった今日まで、こうやって刀を振るっていた。理由はない。ただ頭を空っぽにしたいというだけだった。習ったことはなかったが、あの事件のときは無我夢中で振っていた。霊夢曰く『そのときのあなた、まるでトチ狂った殺人鬼みた이었다ったわよ』と言われたので、次はもつと上手くやりたいからそのついで、的なやつだ。

「朝っぱらからせいが出るわねえくナオヤ」

ふわあ、とあくびをしながら神社の中から出てくる霊夢。

いつもの巫女服だったからもう着替えを終えているようだった。

「霊夢、おこしに行ったんだけどなんでおきないの？」

「知らないわよ。仕方がないでしょ気づかなかったんだから」

「せめて、反応ぐらいはしてくれよ…」

「声が小さかったんじゃないの？」

いや、かなりこえを張ったはずなんだけどなあ。具体的に言うと、声で窓のガラスが割れそうになり「やべツツ!!」って冷や汗がかなり出るぐらい。いやあの時かなり焦った。殺されるんじゃないかと思うぐらい。

「あ、そうだった。霊夢、僕の怪我の塗り薬って何処にある？」

「あの塗り薬ならあなたに全部渡したのが全部だったわよ」

「え?」

僕はこの時まずいと思った。

何故かって言うと、一回僕はその薬塗り忘れたことがあった。その一時間後、身体中に骨が何回も折れたかんじの痛みが走った。その時、僕はずっと悲鳴と床を転がり続けた。あれは、死ぬことより辛いことの本スト10にはいつているだろう。

とにかく、早く塗らないとあれが甦るのは阻止しなければならぬ。

僕は霊夢に急いで、塗り薬が貰える場所を聞いた。

「その塗り薬ってどこで貰えるの?」

そしてこの様だった。

ああ、やっぱりちゃんと霊夢に聞いとくべきだった。

というか、今もう少し手に痛みが走っていた。せいぜいもってあと30分だろう。

この30分を経ったら…。

「早く行かないとツツ!!他の意味で逝くことになるツツ!!」

「お前、一人で何言ってるの?」

「え?」

ダ、ダレエ。

そんな感じで、僕は白髪の長い髪の特徴的なズボン（もんぺ?）の女の人に出会った。

# 第一章

## 第二話

### 気まづい僕と罪償い

「……………」

「……………」

うわあ、きまづいなあ……。

そんなことを思いながら、僕は長い白髪の人、藤原妹紅という人の後について行った。

現在僕は、藤原さんに永林という薬剤師の元に連れて行ってもらっているところだ。なんでも、この竹林は『迷いの竹林』と呼ばれる程の迷宮的なところらしい。なんで霊夢は先に言ってくれなかったのだろうか。

そして、この藤原さんは人間相手のこの『迷いの竹林』案内人らしい。そして僕は運良く藤原さんに出会ったというわけだ。

しかし、この人の髪かなり長いなあ。

そんな感じで藤原さんの髪を見ていると、

「ん？どうした？」

「ツーいや、ごめんなさい、何もありません」

だめだ、こういう初対面の大人の人は会話は難しい。

やはり、未だに父親のことを僕は引きずっているのだろうか？だとしたら、まだ僕は過去のことを引きずっているのだろうか。

考えれば考えるほど、自分に嫌悪感を覚える。

僕の顔も、自然と暗くなる。

それに、気づいたのか、藤原さんが僕のことを心配するように聞いてきた。

「大丈夫か？なにか、嫌なことがあったのか？」

聞かれた僕は、反射的に答える。

「いえ、何もないです」

そんな僕を見て、藤原さんは『はあ……』と、ため息をついた。

「大丈夫だったらそんな暗い顔しないよな？」

「これがいつもの顔です」

僕は嘘をついた。

今度は自分への嫌悪感と罪悪感に襲われる。

「それは嘘だな」

「ツツ!!」

何故、この世界の人たちはこう勘がいいのだろうか。

「お前今、この人たちはなんで勘がいいだよって考えたろ？」

目の前に移動した藤原さんが、まるで、顔に書いてあったかのように、ニヤリと笑って僕に言った。

僕は無意識に一步後ずさる。

「お前、顔に出てるんだよ。バレバレだ。嘘つくなら、もうちよつと隠せよ」

「ごめんなさい」

「あーあー謝んなくていい。その代わりに、教えろよ。お前がなんであんな顔をしたのか」

めんどくさく謝罪を拒否した藤原さんは、一転顔を変えて質問してきた。その顔はまるで、刑事ドラマで出てくる事情聴取をする刑事のようだった。

かつこいいと思ったが、逆に怖いと感じた。

僕は勇気を振り絞り、拒否を求めた。

「言わなくちやだめですか？」

「ああ、だめだ」

「本当にだめですか？」

「ああ、だめだ」

「あなたに必要なことですか？」

「ああ、必要なことだ」

「なん「そんなに拒否するような大事なことなんだな？」……」僕は藤原さんの言葉に詰まってしまった。

だめだ。僕は口喧嘩に弱いらしい。

負けたからには話すしかないか。

僕は父親のことを話す。

「実は……」

しかし、話すことはできなかった。

グシヤア

「え？」

いきなり、藤原さんの頭が吹き飛んだのだった。

そして、これが僕の罪を償う話のプロローグの幕開けだった。



僕の右肩から赤い液体が吹き出ながら、ドサツと肩から下が土に落ちて行った。

「くあツツ!!」

あまりの痛さに顔をしかめて膝をつく。

しかし、そんなことに構っていられなかった。

「藤原さん!!なんか、火をつけるものありますか!!」

切断した時には、もうすぐ隣に来ていた藤原さんにもう火をつけるものがあるか聞く。

ああ、すぐに答えてくれた藤原さんは、人差し指を僕に向けて来た。

その人差し指から、炎が出てきた。たぶん、他の人が見たらおどろくだろうが、今はなりふり構ってられない。

「藤原さん、その炎でこの傷の断面を焼いて!!」

焼灼止血法

傷を焼いて止血する方法だ。

それを理解してかしないかで、指示通り藤原さんは傷の断面を焼いた。

そして、垂れ出していた血も止まった。

僕は藤原さんの肩を借り立ち上がる。

男は、ほう?とそんな声を出しニヤついた。

「おい、小僧。お前、頭いいな。頭がいいことはいいことだが、死に損なうことは悪いことだな」

「お前こそ、人の頭ぶっ飛ばしといてよっぽど悪いことしてんじゃないか。お前、頭大丈夫か?」

藤原さんが男が言ったことを、挑発で返した。

男は挑発されて怒ったのか、顔を赤く変えた。

計画通り、と藤原さんが青い顔して言った。

ん?青い顔?まさか、藤原さん、無計画に挑発したんじゃないや…。

それじゃあ、逆効果じゃん!!

「死に腐れええ!!」

男が地面すれすれで飛んでくる。



くそ!!やるしかない!!  
そして、僕は利き手である右手で腰の刀を抜いた。  
そう、『右手』で。

# 第一章 第四話 炎の弾と目的地

「ん？ええ!!なんで僕に右手が!!」「小僧!!戦闘中に余所見か!!」  
くそ!!」

僕はすぐそこまで近づいている、男への対処が約2秒くらい遅れた。

たかが2秒だがされど2秒だった。

男の右手が次は僕の前頭に迫った。

しかし、今度は男の右手が焼けた。

そう男の右手が赤い炎に包まれたのだった。

「くうっ!!うううあああああああ!!」

現在進行形で燃えている右手をなんとかしようとして、右手を振り回してみたり、右手で殴ってみたりしているが一向に消えない。

そんな愚かな男を、その燃えている右手を一瞬で冷やしてしま  
いそうな目で妹紅さんは見ていた。妹紅さんは男に一步近づいて口を開いた。

「よくも私の頭をふき飛ばしてくれたなあ」

また妹紅さんは一步近づく。

「しかも無関係の小さい子にまで手を出すなんてなあ」

そして妹紅さんは右手の親指を上突き立てた握り拳を作り、人差し指を男に向けた。

男に向けた人差し指からぼうつと炎が揺らいだ。

「救いようがねえよ」

妹紅さんの人差し指から、炎の球が連続して飛び出した。それはまるでマシンガンのように飛び出て、打たれた人のように男は地面に倒れた。

「お前はいいなあ死ねてよお。そこらへんは救いようがあるんじゃないかねえか?」

打たれた今でも痙攣している男に、妹紅さんは吐き捨てるように言った。

つ、強い!!

圧倒的な能力差がこのえぐれている地面を見ればわかる。たぶん、僕と殺りあつたら一瞬で僕が吹っ飛ぶだろう。

僕はこの状況を理解してもなお、尻餅をついた状態で固まっていた。

今の僕の状態を簡単に表すと『完全放心状態』ぼーつとしていた。

しかし、他の理由でもぼーつとしているのだが。

「おーい、だいじょうぶかー？」

そんな僕に大丈夫か聞いている妹紅さん。

ダメです。なぜかいきなり意識を手放しそうになっているんです。

そう言えず、無断で意識を手放した僕であった。

「悪いところはそんななかつたわよ」

「そうか。よかつた」

そんな会話が僕の横でされていた。

背中に感じる柔らかいベットの感触、現在僕は寝かされているようだ。

目を開けようとするが、なぜか開かなかつた。目を強引に閉じられている感触はない、ということはこれは『金縛り』というやつでは？ いやいやいや、そんなことは非現実的だろう。さすがにない……とは否定できない。実際に妖怪にも会つてるし、不死身？ な人にも会つてるから否定できない。

早くこの金縛り状態消えてくれないかなあ。

そんなことを思つてたりしながら打開案を考える。

気絶から起きて最初の状況が、金縛りというのはかなり不幸なことだった。

実際、僕は『不幸体質』を自称している、というか自重しているので、今はもうなんとも思っていない。

いきなり、僕の視界に光が入る。

やっと目が開いたのだ。

金縛り状態から脱出した安心とともに、周りの状況を把握する。

そこは和風診察室のようなところで、僕の寝ている横の椅子には、銀髪の長い三つ編みの女の人と妹紅さんがいた。

僕が起き上がると、銀髪の女の人が僕に気づいた。

「あら、気づいたのね」

「おお、大丈夫か？どこか痛いところないか？」

「はい大丈夫です」

妹紅さんが僕に色々と聞いてきた。まあ、いきなり倒れたら誰でもこうなるだろうなあ。

銀髪の女の人はくすつと笑って妹紅さんを見た。

笑われたのが気に障ったのか、プンプンと妹紅さんは銀髪の女の人に少し怒鳴った。

「なんだよ永琳!!なにがおかしいんだよ!!」

「いや、あなたがそんなに心配したのは久しぶりだったからついで」

「人が倒れたんだ、心配するのは普通だろうが」

さて、と永琳と呼ばれた銀髪の女の人は、妹紅さんの言葉を流しこちらに向き直した。

「私は八意永琳。ここ、永遠亭の主で薬剤師よ」

なんと、僕が探していた人物だった。

## 第一章 第五話 チキンな僕と月

「私は、八意永琳。ここ、永遠亭の主で薬剤師よ」

銀髪の女の人も、もとい八意永琳はその長い銀髪を揺らしながら僕に言った。

永琳はいきなりその席を立つと、すぐその机の引き出しから紙袋を取り出した。その紙袋の中身を確認して、それを僕に差し出した。

「あなたの用事はこれでしよう。痛み止めの錠剤と塗り薬」

「あ、はいありがとうございます」

「？」

現在ぼくは、目の前の人がかきれいに見えている。まるで、僕の目の前には美しい彫刻画があるみたいだ。

というか、幻想郷の人ってなんできれいな人が多いんだろう。霊夢だっけかなりかわいしいし、妹子さんだっけきれいだし。僕は外の世界でなにを見てたんだろう。

そんなことを思いつつ、僕は紙袋を右手で受け取る。

すると、その受け取ろうとした右腕全体に激痛が走る。

「うツツ!!」

「おい大丈夫か!!」

僕は右腕を抱え込む様にしてうずくまる。そんな僕をすかさず気にしてくれる妹紅さん。

なるほど、この痛みは薬によるもの(薬を塗らないでいるときの)の痛みだ。

あれをまた感じるのが嫌ですぐに来たのに、受けることになるとは我ながら不運だった。

それが、僕の次の発言であり、気絶したとき思ったことでもあった。

五分後

「ツツ!? あれをまた感じる事が嫌で来たのに、受けることになるとは我ながら不運だった」

「あら、起きたの?」

気づいたら知らない人がいた。

このパターンは何度目だろう。さすがに飽きた。

反応した少女は、長い黒髪で着物を着ている。まさに、

「かぐや姫……」

「あら、昔そんな名前で呼ばれていたことがあったわね。懐かし

い」

「えっ本人?」

そんなまさかね、とか思いつつ、幻想郷だったらあるかもしれない感じが期待を寄せていたら。

目の前の少女は惚けるように言った。

「ええ、本人よ」

「え?」

「私が蓬萊山輝夜よ」

まさかのご本人登場で、固まる僕。ああ、僕はここで死ぬのかもしれない。とかいうふざけたことを考えつつ、かぐや姫のことについて整理した。

竹取物語。

平安時代初期に成立した、日本最古の物語。

作者不明、作られた年も不明の物語。

ジ\*リ作品にもなった有名な物語。

そう、物語なのだ。

物語のはずなのだ。

じゃあ、なんでここにそのヒロインがいる?

矛盾が矛盾を呼ぶなか、最後にある仮説にツグナイは思い立った。

それは、

また後にしよう、長くなるから。

それで蓬萊山輝夜と認識したとき、僕がとった最初の行動はとい

うと。

「よし、多分これは夢か幻かゆ幽霊だ」

「いや、夢でも幻でも幽霊でもないわよ」

お化けなんかなくならないさー、と苦し紛れに僕が呟く。

輝夜さんがため息をついたが、僕は絶賛現実逃避中だった。

しようがないと、輝夜さんが呟くとえーりーんと大きな声で言った。

すると、ドタドタと足音がこつちまで迫ってきた。

「ひいい、おお化けえ。お化けなんかf u \* k o f f !!」

そして、部屋の前で音は止み勢いよく障子が開いた。

と、同時に僕は毛布に身を丸めるように、身を隠す。

しかし、僕の頭のなかである名言が支えとなつて、立ち直させた。

そう、みんなが知る有名な名言だ。

「逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ、逃げちゃ、

ダメだ!!」

エヴァ\*ゲリオンの\*ンジ君の名言だった。

そんな名言を叫びなら顔を出す（スーパーチキン）と、そこには永琳さんがいた。そう、簡単に言うとは勘違いをしたのだ僕は。

幽霊とかと勘違いしてチキンプレイをしたのだった、と僕は脳内で再生しながら頭を下げる。うるさくしてごめんなさいと。

「うるさくしてごめんなさい。お詫びに今から首をつりましよう」

「大丈夫？ツグナイ君なんで左手に縄があるの？そして、なにに使うの？」

「ははっ…もう僕、社会的に死んだな…もう僕なんて…」

「だ大丈夫よ、まだ起死回生のチャンスはあるわ。多分、いやきつと」

死のうとする僕を、なだめる永琳さんとその横で、今の僕のチキンプレイを思い出したのかお腹を抱える輝夜さん。

こんな楽しい会話は外の世界だったらできなかつたな。なんて思ったりしてみた。

とりあえず、いまは楽しもう。  
限り少ないとどこかで思っている、とりあえず楽しもう。



# 第一章 第六話 五の後のはなしと喪服の事

「それで？その後人里に行って食べ物を買って帰ってきたと」「そう。それで帰ってきたらこんなだったということ」

「お邪魔してるぜー」

「お邪魔してるわよ」

白黒の魔法使い、魔理沙とアリスさんがいたというわけだ。

魔理沙とアリスさんには面識があった。

二人はよく神社に遊びに来るので、必然的に面識をもつことになる。

そして現在、ここに来る前のことを、霊夢達に話した。

「喪服を着た男ねえ…」

「ねえ、その男は最終的にどうなったんだ？」

「妹紅さんに燃やされて、焼死体になったと思う」

「うわあ、容赦ねえなあいつも」

魔理沙はそのことを聞いて苦い顔をしながら呟いた。

実際、殺されてもあの男はなんにも言えないだろう。妹紅さんを爆破して僕の肩を切らせたんだから。運良く妹紅さんは不死身で、僕は……。

「ああ、不幸だなあ」

なんとなく呟いてみる。

すると、アリスさんが不思議そうな顔をして僕に聞いた。

「なにが不幸なの？」

「いや、襲われたことと今までの事が、不幸すぎてちよつと萎えてただけです」

「襲われた理由とか覚えてないの？」

「ない…… とは言えません」

また父親が理由だった。

この世界に来て、まだ父親に縛られるのか。

もし、幻想郷に父親がいたら、と考えてしまったのだ。

「多分、無差別にやってきたんだと「ちよつと待って」……なに、

「霊夢」

またこの人は僕の言葉を遮ってきた。

遮った霊夢が、疑うような顔をして僕に問う。

「その喪服の男って死んだの？」

「だから、ナオヤはそう言ってただろ？」

「……なるほど、それなら聞き出せるかもしれない」

「は!？」

僕の発言に対して魔理沙が驚くようにこちらを向いた。

「でも今お前、焼死体になった言ってたろ？」

「いや、実際にはわからないんだよ。そんなとき僕気絶したから」

「それで妹紅も知らないとなると、………確率は0とは言いきれないわね」

「は!？」

しかし、あの状況で死ななかつたとなると、かなりの幸運か、組織的な物事も考えられるなあ。

まあ、それは考えすぎのレベルのものだが。

そんなバカらしいことを考えていると、アリスさんが真剣な顔で霊夢に問いかけた。

「それで、この後の対処とかどうするのよ」

「………めんどい」

ムスツとした顔で霊夢は言い放つが、アリスがそれを見かねて問い詰める。

「あなたナオヤが襲われてるのよ!!よくそんなことが起きて言えるわね!!」

怒鳴られた霊夢も怒鳴るように言い返す。

「うるさいわよ!!最近変な組織ができたって噂があつて、その繋がりがあるかもしれないんだから下手に手が出せないのよ………」

最後、なぜか霊夢はだんだん小声になるように言った。

そして、霊夢はなにか気づいたような顔をして、僕に言い放つ。

「ナオヤ、明日一緒に出かけるわよ」

このとき僕は思った。

僕に平和はないのだろうか、と。

その後の事のゆるい話 第一回 「ウラベニホテイシメジ」

「んで、魔理沙たちはご飯食べるの？」

「そりゃあそうだろう。それにほら、こんなにキノコあるんだぜ」

「そんなにいらないし、そもそも絶対そのなかに怪しいもの入ってる気がするんだけど」

「大丈夫だぜ!!それにほらこれ食っても」(パクっ!!  
バタン!!)

「だ、だいじょうぶだろうおう……」

「……アリスさん、解毒剤とかありますか？」

「……またなのね」

「(前にもあったのか?)」

魔理沙の持ってきたキノコは、たまに?毒キノコなるものが入っていることが証明された瞬間でした。

# 第一章 第七話 ツグナイとナオト

「ふはあー。うう、眠い」

台所にいる僕は、眠そうに欠伸をしながら朝ごはんを作ることに励んでいた。

魔理沙とアリスさんが帰った後、いつも通りやることを済ませて眠った。ということも無く、喪服の事、父親の事、そして前から引かかっていたことなどが睡眠を妨害し、眠れなかったのだった。

そして、今日は霊夢と人里で情報収集をする事になっている。それに朝から驚くべきことがあった。

「そんな驚かなくてもいいわよ…。」

なんとあの霊夢が、僕より早く居間にいたのだった。

それが衝撃過ぎて、自室に戻りそうになったほどだった。

そんなこんなで今に至りちようど朝ごはんができた。

「霊夢、朝ごはんできたから持ってくの手伝って」

「はいはい、今日何処行くか覚えてるわよね？」

「ん？ああ、人里でしょ？うん、覚えてる」

「そう、それならいいのよ……。」

「？」

最後、霊夢が言葉を濁した。

朝食が運び終わり、僕と霊夢は朝食の前に座る。

「いただきます」

「いただきます」

今日の朝食は何故か懐かしい味がした。

・  
・  
・  
・

「さて、行くわよ」

霊夢が神社でやることを済まして、僕がいる鳥居に小走りで行く。

ちなみに、空を飛んでいくが残念ながら僕は飛べない。だからこ  
ういう手をとった。

「本当にやるの?」

「まあね。これが自分一人でできることの一つだからね」  
そう言つて僕は片手に良く切れるナイフを首にあてがう。  
そして、一気に押し込みながら、引き抜く。

「ひゅっ」

首から大量の血が流れるのがわかる。  
崩れるように倒れるなか、霊夢が目を背けるのが見えた。  
そして、意識が儂く消えた。

不意に、バチン!という音が聞こえる。

少し頭が痛むが、視界に光が戻る。

「大丈夫?」

「ん、まあ頭痛がするけど何も問題ないかな」

服の上には倉庫から引つ張つてきたビニールのシートに穴を開  
けてその穴に頭を入れて、首から下はビニールのシートに覆われてい  
るため血で汚れない。

そのビニールのシートから脱出して、その小さい体でスタートの  
体勢に入る。

「それじゃ、よーいどんで行くわよ」

僕は下半身に体重を乗せ始める。

「よーい

グッ、と下半身に力を入れて

どん!!」

それを解き放つ。

すると、僕の身体は一瞬で宙に浮いた。

「速っ!!」

自分が行つたことに自分で驚いた。

一方霊夢は平然と真つ直ぐ正面に飛んでいた。

僕は浮いた身体が自由落下し始めた事を察し、着地に取りかか

る。

だんだんと地面が近くなってくる。  
もう手を伸ばせば地につくレベルだった。

「コンッだー」

腕をしなるようにして、地面を叩きつけた。

正面に力の向きを変えて、転がる様に着地する。

そして、転がる勢いを殺さずに、うまくそのまま立ち上がる。

僕はそのまま全力疾走した。

上を見ながら霊夢を見失わないようにしながら走った。

しばらくすると人里が見えた。

僕は人里が見えたことで体力の消耗に気づき、どっと疲れが出た。

「さあついたわよ。つてどうしたの？」

「正直 ゼエ 言うけど ゼエ これつらいよ ゼエ」

「飛べれば楽よ」

飛べないやつは辛いと主張したいのかこいつ。

霊夢の発言に少しイラツとしながらも、人里の門をくぐった。

現在甘味処で僕はお団子、霊夢は饅頭を食べていた。

そんな甘味を楽しんでいる僕と霊夢は、揃いも揃って疲れた顔をしていた。

「ねえ霊夢」

「なにナオヤ」

「進展あった？」

「あるわけないじゃない。そっちは？」

「そんなものありませんでした」

『はあ...』

なんの情報も得られず、甘味処に逃げ込んできたわけだった。

僕はお団子の串の先っぽを指で突つつきながら霊夢にあることをきく。

「あの喪服なんで俺のこと襲ったのかな？」

「知らないわよ。ただそこにいたからとかじゃない」

「否定はできないな・・・」

考えられる原因。

それを目を閉じて考える。

お団子の串をペン回しのように遊びながら。

人里での妖怪達の襲撃でのことか？ ありそうだが、僕ではな

く霊夢を狙うだろう。

父親の事か？ 父親は死んだのか？ いや、自殺するような人じゃないだろう。

それじゃあなぜだ。

なぜ？

なぜ？なぜ？

なぜ？なぜ？なぜ？

まで。

そのとき、僕は今までの自問自答に違和感を感じた。

「ねえ霊夢」

ある事を聞くために隣を見た。

しかし、そこには霊夢の姿はなく、その遠くの風景があった。

内心少し焦りながら店員に聞く。

すると、霊夢は書き置きを店員に預けて置いたらしい。

そこには先帰るから調査を進めろと書いてあった。

それを読み終えたとき、少しイラツとしたが手紙の通り調査を進めることにした。

「やっぱり情報が無かったなあ」

今回の成果をぼやきながらも帰路を辿る僕。

両手に今日の夕食の材料が入っている袋を下げながら歩いてた。

目の前に無駄に長い石階段が現れ、それをグダグダと上る。

僕の身体は非常にだるかった。

僕的能力『自殺行為で力を増幅させる程度の能力』は、使用して

二時間経つとかなりの倦怠感と一緒に力が値が元に戻るのだった。

倦怠感とは能力の上昇値と比例する。今回の上昇値はかなり高めだと察しが付いている。

「帰ったら、夕食作るの霊夢に丸投げしよう」

住み込みのお手伝いが聞いたらビックリしそうな事をいう僕。

そんなことを企てていると、神社が見えてきた。

階段を上り終えると、真っ直ぐ神社に向かい正面の扉から入るとすぐに、例の人を呼ぶ。

「霊夢ー、荷物運ぶの手伝ってー」

なんの返事もなかった。

神社の中には人の気配も無く、やけに異様な空気が漂っていた。

「まさか…」

急いで僕は居間に向かった。

僕以外誰もいない居間のちゃぶ台の上に一枚の何か書かれた紙がおいてあった。

袋を離すように捨てて、紙をくしゃくしゃにする勢いで取る。

その紙には、見慣れた丁寧な字である事が書いてあった。

「よう、久しぶりだな。ナオヤ」

博麗霊夢の命は俺が握っている。償井直人より

「突然だがあ、久しぶりに殺し合おうや」

「クソジジイイ!!」

夕日差す神社に一人の少年の怒りが散った。



第一章 第八話 殺し合いと崩れゆく意識の中で

腰から刀を素早く抜き、構える。

飛び付いて殺してやりたいという衝動に駆られるも、今飛びついたら相手の思う壺だ。

「賢いね。流石僕が育てた子供だ。でもね、君は1つ見落としてるんだ」

あいつが手を開いてこちらに向ける。

何かを察知した僕は、ちやぶ台にあった湯呑みをあいつの方に投げける。

すると、今さっき投げた湯呑みがグニヤあ、と音を立てて歪んだ。それを見て僕は急いで縁側に出て、あいつの方へ真っ直ぐではなく囲むように走る。

「うん正解だ。俺にも能力が出来て、静止している物を歪める能力なんだけど、これがどうも使いにくいだよねえ」

あいつは僕を小馬鹿にするように話す。しかし、心を一つの物事に集中すればなんとか平常心で対処できる。

しかし、これが裏目に出た。

「さあ、問題だ。今から僕は何をする？制限時間は5秒」

僕はその間何もしないと考え、走りながら首に刃を当てる。

「4」

そして引き抜く。

「3」

意識が途絶える。

「2。…飽きたからいいや。正解は…」

バチンと頭の中で音が鳴りひびく。

意識が覚醒した時見えた景色は…

「5回殴り飛ばす。でした」

「早っ!!」

あいつが一瞬にして側まで移動して、俺を地面に殴り飛びした。

「アアっっ!!」

「あと4回〜」

地面に小さなクレーターが出来たが、そんなのお構い無しに殴られ弾んで中に浮いている僕の身体をかなりの勢いで殴る。

吹き飛んだ僕は木々を倒しながら静止する。

殴られた時、確かに骨や内蔵が破壊された、しかし僕の能力は再生力も上昇するようだ。

僕は手元に刀が無いことに気づき舌打ちする。

「舌打ちする余裕があるんだア」

「早すぎだろうがア!!」

多分、あいつの能力は対象はものだけじゃない、自分のステータスとかも歪めることごと出来るのだろう。

能力の性能が段違いすぎる。

内心焦りながらあいつの攻撃を冷静に避ける。

「とっておきだ」

そんな言葉を吐き出しながらあいつは上着のポケットに手を突っ込みながら後ろへ飛ぶ。

そして、あいつが投げたものは……

「手榴弾かよ!!」

そしてそれが爆発すると、中から鉄の破片のようなものが飛び出し僕の体へ降りかかる。

しかし、あいつの狙いはそこでは無い。

鉄の破片が振り終わったそのとき、

「ほらぁー防いでいても仕方ないよぉー」

いつの間にかあいつは横に立っていた。が、そんな事はもう予測済みだった。

「そこだア!!」

俺は腰を低くし、俺の顔面に当たるはずだったパンチを躲しながらあいつの腹に綺麗な正拳突きを突き刺した。

「うあツツ!!」

「吹き飛ばエエ!!」

それを身体を前に一步踏み出しながら腰に力を入れて、ぶん殴り飛ばす。

能力の力をフルに込めた攻撃だ。あいつはミサイルのように大空の方向に飛ばされた。

「はあ、はあ、はあくうツ!!」

まだ、能力を発動して10分程度なのに能力が切れた感覚がした。僕は膝から崩れ落ちた、身体に力が入らなくなる、意識が遠のいていく感覚。

しかし、僕は遠のいていく意識で最後に見たものに驚いた。

それを見て僕は、動け、動いてくれ、と俺の身体に指示を送る。が、そんな事を無視して俺の意識は遠のいてく。

お願いだ。動いてくれ。

僕はもう人が死ぬところを見たくないんだ。

もう無力な俺は嫌なんだ。

だから、だから動いてくれ。

霊夢…を助けた…いんだ。

嫌…だ。目の…前…霊…む…しぬなん…て。

おね…が…だ。

動い…くれ。

ーじゃあ、少しだけ手を貸してあげる。ー

# 第一章 第九話 「イジヨウナ死への願望」

さあ、私の手を取りなさい。そして、あなたを傷つけたあいつを殺すのよ。

—いいのか？お前の手を取ってしまったて

いいのよ。てか、あなたの願いを叶えてあげないで、神様を名乗れないわよ。

—ああ、そうだな。叶えてくれ、あの霊夢を傷つけたあいつを殺してくれ。

了解—————

そして、僕の自我が崩壊した。

／＼  
／

いつからだろう、僕がこの世界をモノクロに捉え始めたのは。

いつからだろう、毎日が苦痛だと感じ始めたのは。

いつからだろう、僕はこの世界は悲しみで出来ていると仮定し始めたのは。

だめだ、いつからか思い出せないや。

こんな僕は人間として失敗作なんだろうな。

あれ、僕ってなんだっけ？

……まあ、いいや。僕は今この瞬間を。

この赤い液体のついた何かを、

殺してから考えよう。

「ぐはツツ!!クツ!!ここまでとは、予想外だった。神の力とは、もつともつともつと!!しツリツツイっ!!」

「そんなに知りたいなら教えてあげるわよ。ナオヤ」

「楽しもう!お父さん!」

僕は隣にいる黒髪の女の子に言われて、お父さんと遊び始める。お父さんが向けてくる銃を見て、弾が出てくるスピード、などな

どをちよつと計算しそこにあつた石を拾う。

パンツと乾いた銃声が鳴りひびく。0.5秒前ぐらいに石を投げる。

すると、投げた石は破裂するがお父さんの肩が弾ける。

それを見て僕はもう1度石を拾い、今度は隣の木に投げる。

次は反対側の木に投げる。

お父さんの後頭部と弾けた肩に石が凄い勢いで当たる。

「グッア!! 凄い計算力だ。これは歩くツスーパーコンピューターだなッ!! ぜひ持ち帰らなければッ!」

「生憎、ナオヤは私の家族なのでお引き取り願うわ」

「やだね。こいつは俺の研究ザイリヨッツ!! ぐあああ!!」

「黙れ雑種。ナオヤは私の家族よ。二度とこの世界に生まれ変わらせなくしてやる」

女の子は右手の掌をお父さんに向けて、唱える。

「我が神の名を持って断言する、お前の未来を来世を、揉み消す、」

唱えるとお父さんと女の子の間に金色の細い線ができた。周りには金色の粒子が上り、金色の風景が出来た。

お父さんは女の子がやっている事が理解できたのか、お父さんはその線を断ち切ろうとする、がそんな事をさせる僕ではない。

「無視しちやダメだよ? お父さん!!」

「くつつつそがアア!!」

僕は間を一気に詰めて、お父さんに最速フルパワーで腕をおりにいく。それを必死に捌くお父さん、僕は吹っ飛ばないようにお父さんの足を踏みながら狙いに行く。

だんだん捌ききれなくなるお父さんを見て、ラストスパートをかける。

1発、2発、3発と当たるようになり、ついにお父さんの両腕から竹を割ったようなバキツツという音がする。

「アアツツアアイナア!!」

「次は背骨を!!」

「もういいわよナオヤ」

「はあい……」

僕は女の子の命令が聞こえたので、渋々引き下がる。変わりに女の子がお父さんの前に出て喋り出す。

「あなたは最終的に何がしたかったの？ツグナイナオト。いや、研究者ナオト」

「あはは…、『何がしたかった』ねえ…、確かに僕は最低なことをしたのかもしれない。でもね、人間の好奇心は押さえられないんだよ!!なぜかって、それは人間だからさッ!!だから、ナオヤを実験台にしたことは、人間らしいことさッ!!アハハ!!人間の好奇心は素晴らしい!!」

僕は目の前のお父さんを見て、一瞬尊敬してしまった。しかし、僕は隣にいる女の子の言葉によって遮られる。

「まあ、私には人間のコーキシンとやらを理解することはできないし、一生あなたの考えを肯定することはできないわ。私は三年間ナオヤの心の世界でナオヤのトラウマを消し続けてたわ、その中で私はナオヤが望んでる事もわかったし、ナオヤの異常性もわかった」

女の子は顔を少し暗くして続けた。

「ナオヤの異常性の本質は『死への願望』。異常なまでの死への願望が能力を生み出し、私を『生んだ』。そう、呼んだのではなく、生み出したのよ。まず、そこが異常だったのよ。そもそも、神様を生みだすなんて、人には到底できないのよ。それをやってのけてしまったのよナオヤは。」

でも、ナオヤの望んでることは違った。」

女の子は僕の肩に手を置いて、お父さんに言い放つ。

『僕が居ていい世界で静かに過ごしたい』。これがナオヤの願いよ。こんな寂しい願い如き叶えてあげないで、私は神様を名乗れないのよ。」

「……ア。アハハ。アハハハ!!そうか、それが君の成すべきことか!…わかった。これなら僕がいなくても大丈夫かな」

女の子の顔はお父さんが何を言っているかわからないような顔

だった。しかし、僕は何を言っているかがもう少しで、もう少しでわかりそうな感じがした。

「守れよ、神様。その秘密兵器で、妻を救ってくれ」

その言葉を残した後、お父さんはポリゴンの欠片のように淡い光を放ちながら散った。

僕はそれを傍観していたが、女の子はなぜか涙を流していた。

僕はそれを見るのが耐えられずに、抱きしめようとしてしまうけれど、こんなときに足がすくんで動けない。

いや、これは…そうか…意識が…

「そんな、…まさか、私は勘違いしてたっていうの?」

暗い、暗い森の中で神は嘆く。

取り返しのつかい事をした罪悪感ではなく、今彼女を襲ってるのはただ、ただ、果てない虚無感だった。

私のせいで、少年の大切な人や、父親を……

「うあああ!!」

暗い暗い森の中で1人の神様の鳴き声が響く。

黒い暗い雲を引き連れながら、雨音も響き始めた。

## 第一章 第10話 「少年から…」

僕の中にいるはずのあいつが泣いていた。  
気付いたらそんな風景を僕は見ていた。

「なにやってるんだあいつ……」

僕は自称神様を名乗る女の子が、大泣きしている子供のように泣いているこの状況にかなりの違和感を感じていた。

そこで、その女の子の所に向かうことにした。

あいつのところまで約50m、走ればすぐだ。

最初はゆっくり走り始め、そこからだんだんと加速する。

たん、たん、たん、と一定で刻み良い足音が耳を通過する。

走る、走る、走る…がたどり着かない。

そんな現象を目にするが、止まらずに逆に加速をつける。

しかし、息が切れて流石に立ち止まり、膝に手をつける。前を見

るが一切距離が縮まってはいなかった。

「なんなんだよ……」

愚痴をこぼしながら地面に腰を下ろす。

いくら走っても距離は縮まらない、この現象をどうにかして打開したい。じゃないと神社にすら帰れない。

ため息をこぼしながら視線を下に下ろす。

目を閉じて考える。

不意に、今までの1週間の出来事が脳裏に浮かんだ。

幻想郷に来た時の事、妖怪の里への襲撃の事。

色々あった、そうここに来て約1週間の内だ。

短かった1週間が、まるで1ヶ月のように長く感じた。

そんなことをか考えた瞬間、僕の胸の中で何かが蠢いた。それはどす黒く、俺に似た何かな気がした。

「それでいいのか」

「ツッ!」

それは突然だった。

森が静かにざわめいたかのように違和感が無く、それは俺ではな



いなにかの声だった。

「僕はそれでいいのか」

それは僕が気持ち悪いものを吐き出すように続ける。

「辛いんだよ、優しくされるのが」

「自分がここにいていいのか分からない」

「…めろ」

「救われたいとだけ願っているだけ」

「過去だけを見つめていていいのか」

「やめろ…」

「もう疲れてんだよ、休ませてくれ」

「不幸な自分に酔っていたいんだよ」

「やめろ!!」

しかし、この心に刺さるような言葉の嵐はやまず、逆に数を増していった。

僕は分かっていたんだ。

この不思議な白い空間は、あの少女と会う時の空間に似ているものだったことを。

少し考えれば分かることだった、いくら走っても元の位置に戻される、この不思議な声が嵐のように発せられる。

こんな現象を起こせるのはあの空間しかない。

「ということは、ドアを開けないと…うるさいなあ」

この声に少タイラつきながら、僕はもう1度周りを冷静に見渡す、が。

「どう見てもそんなもの無いなあ…」

まだだ、考えろ、何かあるはずだ。いや、

何かある。

思いだせ、この空間から出るとき何をやった、あいつと会話したあとドアノブを捻って出る。

これじゃダメだ、もっと前提条件があったはずだ。

あいつは僕が出たい時なんて言っていた？

思い出せ、思い出せ、思い出せ、、

「…見つけた」

分かったら即実行。

僕はすぐにあいつが、あの少女が言っていた「出たいと願う」ことを実行する。

1度目を瞑って心を落ち着かせる。すると、あんなにうるさかった声も途端に静まった。

ゆっくりと、ゆっくりと目を開ける。

心の中で静かに願う、ここから出たいと。

出て霊夢や魔理沙達に会いたいと。

幻視しそうな程にドアノブが目の前に見える。何故か目の前に少女は見えなかった。しかし、そんなことはいちいち気にしていられない。願うただただ願う。

幻視しているために見えるドアノブに手をかける。

手には鉄の冷たい感触があった。

そんな感触と共により強く願った。

「ここから出たいんだ、邪魔をしないでくれ」

後ろに気配を感じた。

それは僕が生きているなかで一番多く感じた者だった。

「僕はもう後ろだけを向いていたくないんだ」  
だから、

「だから、」

「  
そう、そいつにぶつけるように叫んで…」

赤い天井。

それが僕が起きて見た最初のもだった。

嗅いだことのない甘いにおい、ふかふかなベットの感触、それだけで博麗神社ではないことを証明していた。

「何処だここ…」

ベットから起きて床に足をつける。

周りをちゃんと見渡すと、そこは赤で統一された部屋だった。

もちろんそこは見覚えのない部屋でお起きたらここで寝かされていたというお決まりのパターンだった。

「さて、どうしたものか」

この部屋から出ようにも、勝手に出てそこら辺うろちよろされるのは無作法というかなんと言うか。

とにかく、このムズ痒い状況から脱したい。

「あれ、起きてたんだ」

部屋にあった窓を眺めていると、後ろからぼーっとしていそうな声が出た。

「びっくりしたよー、森を散歩してたらツグナイ君が倒れてるんだもん」

声の主を見る為にそちらへ向くと、そこには

「こんにちは、私のこと覚えてる？」

そこには、妖怪達の襲撃で居なくなつたはずの少女がいた。

「え？お前、居なくなつたはずじゃ…」

「うん、確かに居なくなつたよ。あの時間にはね」

彼女は自分の言葉に違和感を残した。

「ここに居るのは私を助けてくれたから、お手伝いさんとして住み込みで働いているからなんだよ」

「僕と同じかよ」

「それと、まあ…私が能力が抑えられないからかな」

能力と聞いて自分の歪な能力を思い出す。

そんな僕を気にせず、話を続ける少女は少し間を置いて、言った。

「私の能力は、『空間を司る程度の能力』なんだよ」

僕はその言葉を聞いて少女に一言言った。

「チートじゃね?」

「だよー」

## 第一章 1話 「再会後…」

最近、忘れていた事がある。  
事というよりそれは感覚で、それは数日前失ったものだ。  
本当に懐かしい感覚だ。

たかが数日前というだけなのに数年も前のように感じる。

あの僕がこの不思議な世界で1番最初に絶望し、一番最初に生き甲斐を得れた日。あの日以来の感覚を、今思い出した。

この感傷に浸れるのなら、意外と忘れて思い出すのも悪くないかもしれない。

赤に統一された建物、紅魔館。

そこには悪魔が住んでいるという。

真つ赤な建物に悪魔、なんてびったりなセットだろう。なんて思っているだろう。

紅魔館の内部事情を知るまでは。

「うあー!!また負けたア!!」

「ふっ…この私にランプ勝負に勝つなんて100年早いわ

よ」

「流石です、お嬢様」

「何故か漂うぼんこつ感」

赤い館のなかで、これまた赤を主体とした丸いテーブルを囲んで、ランプに興じる男子一人と女性三人。

一人は蝙蝠のような翼を持つ見た目幼女、その隣に座り煽てる銀髪のメイド、宝石のような翼を持つ金髪幼女、そして僕。

こんな異質な空間に僕がいるだけで僕も特殊な存在なわけではない。というか、凡才だ。

こんなところにいるのには理由というか、そういうものがある。

俺が紅魔館で、人里で起きた妖怪達の襲撃で死んだと思われた女の子『ヒガン』と再会した日、同時に霊夢が永遠亭に搬送されてい

たことがわかった。そして、現在僕はその入院費を紅魔館で働いて賄っている。ちなみに日本円に直すと、五百万らしい。

しかし、それほど長く居座るつもりはなく、一か月住み込みで紅魔館にて働けばいいだけだ。めんどい。

「そういえば咲夜、ヒガンは？」

「ヒガンは今人里におつかいに行っています、妹様」

僕は赤いテーブルに散りばめられているトランプを一つにまとめる。

すると、銀髪のメイドの咲夜さんが僕に指示をする。

「トランプを私の部屋の引き出しにしまってきたら、東館二階の廊下の窓を拭いてきて、終わったらその階の階段を掃除してきて、それも終わったら玄関で待機して待つて頂戴」

なんとというか、この仕事、ブラックじゃありませんかね…

「ふう、なんとか終わった」

廊下の掃除をなんとか早く完璧に済ませ、身体にのやりきった感に浸る。

掃除はやればやるだけ手際良くなるし、何より集中して行える。意外とこの仕事僕向きなのかもしれない。でもやり過ぎは良くない、過度な行いはブラックになる。

「さて、玄関に行こうかね」

てか、あのただだっ広い玄関でなにを待つというのか。

「ーいやわかった、理解した、完全に出迎えろってことじゃないですか咲夜さん」

そこにいないものの名前を呼び、嵌められた感が半端ない文章を紡いだ。

はあ、とため息を吐きながら、意外とすぐそこにある玄関に向かう。

多分この指示の意味は、「ヒガンの荷物持ちをしろ」っていうのだろう。とても、咲夜さんらしい。

「ただいま帰りましたー!!」  
元気な声が玄関の方向から聞こえてくる。  
「急ぐか」

駆け足で彼女を向かいに行った。  
目の前には、もう少しの景色広がっていた。

## 間の物語 章まとめ的な説明回

作者「ハイハイこんにちはー、いつも元気がよろしいとは限らない作者？のそーだぜりーです」

主人公「この作品の主人公を務めてます、償井直也です。あ、青年期（第惨章のときの方）です」

この回は、第一章最終回までの1話1話を解説する、最も無駄っぽい回です。

あ、ナレーションのボコし役『誰か』です。

作者「さて、最初に序章の記念すべき第1話についてです」

主人公「ああ、作者が初めて投稿したものだね。うん、あれは少し迷走してたね」

作者「あれねえ、うん。意外と出だして書くの難しくて書きづらくて、最終的にあんな感じにまとまりまって、今見てみると『下手だなあ』って感じ丸出しなんだよねー」

主人公「そんな第1話は、主人公の前提的な設定紹介で終わったんだよね。たぶん、あのところでの父親の印象に囚われがちな人が多いと思うんだけど、そこんとこどう？」

作者「うん多いと思う。父親の設定はあれで終わりじゃなくて、まだまだ出てないところが多いかな、それこそ父親視点でのお話ができそうなくらいに」

主人公「あいつ視点って、俺的にはちよつと控えていたきたいたい」  
作者「いや、父親はこの物語ではかなりのキーパーソンだから、出す可能性は高いかな」

さあ、次行こうか。

主人公「次は、第二話かな。うん、あれは第3話へのフラグ回だったね。3話は俺としてはあの時はかなりあいつが死んだことは、辛いというより苦しかったし、もう二度と味わいたくない経験だな」



作者「ああ、あれね。実はあの時の心の表現って、僕が実際に体験したことを元にしたんだよ」

へえ、聞いたことないことだなあ。ぜひ詳しく

作者「おけ。まあ、中2の夏のときに僕のひいおじいちゃんが死んで、お葬式の人に実家で大泣きしたことがあるんだよ」

主人公「へえ、そんなことが」

作者「うん。そのとき、心の中で死ぬ前に何も伝えられなかった自分を憎んだり、罵ったりとか女々しい事ばかりして、それでまわりの大人を見たら金、金、金。みたいな感じで。僕のトラウマの一つかな」  
主人公「なるほどねえ。確かに、意外とお金に魅せられている人は多いよね」

はい次、4話。

作者「4話はこの物語の分岐点であり、この物語を書き終わった時に「やっちゃまった」って思ったことの1つだよ」

主人公「ああ、あとがきで書いてあったね。それでもこの回は主人公としてはかなりいい選択だと思うよ。家事やるのめんどいけど」

作者「まあねー、ちなみにこれがなかったら紅魔館いきだったんだよ」

主人公「紅魔館かあ。姉妹共にめんどくさそう」

作者「そこでツグナイくんは、大妖怪レベルの力を手に入れる予定でした」

主人公「何それすごい」

後半へ続く

# もしもツグナイ君が紅魔館スタートだったら 一 滴目

ええと、ツグナイです。

現在、訳の分からない状況に陥りました。

「今日からあなた、ここの執事やつてもらおうから」

「…わけわかんないんですけど」

起きたら真つ赤な部屋にいて、銀髪のメイドさんについて行った  
らこんなことになっていました。

アンパンマンもびつくりな状況だねうん。

「断るとどうなるんですか？」

「そうね…今日の私の晩御飯になるわね」

晩御飯って… と言えば人里の長のおじいさんが言ってたな、  
『あの真つ赤な館には極力近づくな、あそこの主は血を吸う鬼だから』  
って。

ああ、なるほど

「吸血鬼か」

「ご名答。そうよ、私は紅魔館の主にして純血の吸血鬼、レミリア

ア・スカーレットよ」

「それで、そんな御方が僕に何故執事をしろと？」

「手際が良さそうだったから」

「まあ、家事全般は出来るけど…」

確かに僕は家事全般はできる。しかし、特別家事の消費スピード  
が早いわけでもなく、ただただできると言うだけだ。

そんな感じに疑問を心に押し込みながら、目の前の紫の髪の少女  
吸血鬼の目を見ないようにしながら見る。

「吸血鬼の特性は知っているのね」

「色んな本で登場しますから。そんなことより執事の件ですが」

まあ、受けなきゃ死ぬわけだし、明らかに詰んでるから選択肢は  
一つ。

「今日からよろしくお願いします」

「ええ、よろしく」

僕は執事になる事になりました。

村人↓紅い館の執事

お嬢様ことレミリア・スカレットが僕を執事として任命した後、銀髪のメイドの女性を僕のお世話係にしました。

「十六夜咲夜よ。よろしく」

「よろしくお願いします」

僕はその人にペコペコしながら、この紅魔館の構造、財政、妖精メイドのことなどを聞いて決意しました。

この十六夜咲夜という人には、あまり負荷をかけないようにしよう、と。

いやだつて聞いたところ重要なものとか、本当は下の人がやることをこの銀髪メイドさんが1人でやっていることを聞いて、『この人1年に何回身体壊してんだろう』とか、『よく生きていられるなあ』と思っっちゃったもん。

「ツグナイ君。階段のお掃除お願いしてもいいかしら?」

「はい!!喜んで!!」

「その後、パチュリー様のお手伝いをお願いします」

「わかりました!!」

ということ、僕は必死に執事の仕事をこなしていました。意外と楽しいけど身体の耐久値が充分か心配です。

2日後

「わっせわっせ、と。パチュリー様、ここでいいですか?」

「ええ、そこに置いておいて…。ねえ、ツグナイ君」

「はい、何でしょうか?」

大図書館の魔女、パチュリーノーレッジは真剣な顔をして僕に聞いた。

「あなた、魔法使ったことある？」

「いえ、ないですけど..」

「ということは..」

すると、パチユリー様はぶつぶつと黙り込んでしまった。

仕方がないのでパチユリー様の周りを片付けていると、いきなりパチユリー様が僕を呼んだ。

僕がパチユリー様のもとへ着いた時の、最初の言葉が、

「ツグナイ君。あなたには魔法の才があります。それは、とてつもなく」

「え？」

「レミイには許可が降りたので、今日から魔法の特訓をすることになったわ。よろしく」

「いやちよつと待ってください。いきなりすぎませんか？それに、僕は執事という仕事があります。そっちを疎かにはできません」  
僕は急な通告を抗議する様に申し立てた。

しかし、パチユリー様は僕に冷たく、そして鋭く返した。

「いい？もう一度言うわよ。レミイには許可が降りたのよ。これの意味、分かるわよね？」

「ぐうツツ!!」

お嬢様を盾に出されたら、流石に言い返せない。くそ、チートや。チーターや!!

「さて、初めは初歩的な魔法からやるわ。こあ、2の2のしの三欄目の三段目に初歩的な魔法の本があるはずだから取ってきて」

「わかりましたー!!」

「ああ!!僕も手伝います」

ありがとう、と感謝されながら僕は小悪魔さんの横な並んで歩いた。

ああ、なんか嫌な予感がとてつもなくするのだが。この予感よ、外れてくれ。頼む..

もしもツグナイ君が紅魔館スタートだったら 二  
滴目

ツグナイです。最近、咲夜さんに体力面が良くなったことがばれて仕事量を増やされました。そのおかげで、身体が耐えられるか心配です。なんでバレたんだろ…

それで魔法の事はというと、結構進歩しまして現在…

「ギアアアアアアアアツツ!!」

人を燃やしてます。

レミリア様を殺しにきた人の一人で、実験台一号として僕の得意な魔法の「発火と増幅」をしていました。

黒い神父服を着た男は僕の前で未だに燃え続けている。神父と僕はある程度離れているが、こっちまで火の熱気が伝わってくる。

「グツつぞツツ…!!くつつぞ、くつぞくつぞくそくそくソクソクソクソクソクソクソクソクソ!!」

「黙れよ。死ぬときぐらい、黙って死ね」

僕は火を強め、神父の皮を溶かしていく。

「ああ…!!ぐああ…」と呻きながら、自分が焦がし溶かされていく事に、抵抗がなくなっていく、終わりにはボトン、と焼死体となつて燃え尽きた。

その生物から物に今変わった物を見て、

「…人が死ぬ時つて意外と呆気ない」

なにかを空に吹き溶かしながら、館内に戻った。

「終わったの?」

館内に戻ると、そこには銀髪メイド、もとい咲夜さんがいた。

咲夜さんの姿は、人殺しを今していたはずなのに何故か綺麗だった。

「なんで咲夜さんのメイド服綺麗なんですか?」

「それは…慣れね」

「…なるほど」

何故か咲夜さんが言うのと妙に納得感が出てしまい、咲夜さんの服が綺麗なのが当然のように見えてしまう。

しかしこれでレミア様を殺しに来た奴らは、全滅した。今殺した奴の顔を思い出す。

あの焼き焦げた、溶けるようにして焼けた神父服の顔を。

ああ気持ち悪い、グニャグニャと僕の心臓部分でなにかが蠢いている。

僕は人を殺した、焼き殺した、あの時、あの時、僕は、僕は、どんな顔をしていたのだろうか。

「ツグナイ君、あなた今日から少し休んでいいわよ」

「えっ？」

唐突の通告に戸惑う。

そりゃそうだ、考え事をしている最中にいきなり言われたんだ、しかも真顔で。繰り返す、真顔で。

「えっと、なんでですか。僕なんか失敗しましたか？」

「いや、それはないわ。むしろ、優秀すぎるくらい良いのよ」「ならッ!!」

「だからこそ!!」

咲夜さんは僕の切り返しを遮るようにして、誇張して話した。僕はその切り返しを出せないまま、ただ聞いているしかなかった。

「だからこそ、休みを必要とするのよ。出来すぎるあなたの思考と技術は、あなたの精神と身体に大きな負担をかけるわ。倒れちゃ元も子もないし、それにお嬢様が心配するわ」

「……………わかりました」

「お嬢様には私から言うから、あなたはもう上がりなさい」  
「…はい」

僕は少し足取りを重くして自室に向かう。

咲夜さんはそれに踵を返して、主人のいる部屋へ向かうのだった。

「咲夜、良い判断だったわ」

「お褒めに預かり光栄の至りです」

そこには紅魔の主たる吸血鬼と、その従者たるメイドが主の机を挟んで会話していた。

「恐らく、お嬢様が危惧するものがツグナイの心の中で活動し始めたのかと」

「まさかトリガーが人を殺すことなんて、恐ろしいわねあの男は、いや主犯は「あいつら」か」

「しかし、あいつがこの幻想郷にいる限り、ツグナイの身に危険が及びます。どういたしましょう」

「あいつ自身は、自分の身内を殺したくはないはず、でもあいつらはツグナイの中にいるアレを取り出して、誘拐したい。ツグナイはアレに依存する形で生きている……まるで絡まった糸ね」

主は額に手を当てため息は混じりに吐く。

「……とにかく、ツグナイにはあまり負担をかけないようにしなさい」

「承知いたしました」

少年は手を赤く、紅く汚してしまった。

それにより作動的に作動した自滅機構。

作成者は語る「やりたくはなかった」と、泣きながら。

依頼主は笑う「死にたくないなら心臓を差し出せ」と、化け物みために。

背負わされた少年は呟く「生きたいだけなのに」と、苦しげに。

生きていれば際限なく生まれる苦しみと辛い過去、一人は泣き、一人は笑い、一人は苦しむ。

さて、そこにイレギュラーを混ぜればどうなるのか。

そう、例えば、『破壊する狂った人形』とか。

「やつと着いた」

僕はやつとたどり着いた大きな扉を見て、これからの事が頭によぎる。

妻の事、ナオヤの事、そしてあの人間を騙る化け物どものこと。今はそれどころじゃない、このチャンス逃してしまうのは死刑レベルでやばい。

扉を開ける。と、そこは人形の死体がそこらに散らかっていた。

「だれ？」

声の方、大きな大きなベットに腰掛ける、宝石の翼を持つ幼女の方へ向く。

「やあ、僕は君に頼みごとがあつてきた」

さて、化け物ども、せいぜい騙されてろ。



ぶれいくたいむ

1

「… 無いなあ、」

はあ、とため息をつく午後1時。

現在僕は博麗神社の自室で鞆をあきっていた。

その鞆は、普通のスポーツバックで元々そこには外の世界での僕の私物が入っていた。ちなみに、このスポーツバックは僕が持っていたものではなく、全く知らないバックであり、僕の幻想入りは誰かの意図的なものではないかを見ていた。

まあ、今更どうもしないが。

「うーん、無いなあ。入ってたはずなんだけどなあ」

そして今探しているものは、僕の大切なものであり、僕の数少ない宝物と呼んでいる命をベットしてもいいものだった。

それは、

「確かここに入れたはずなんだよなあ、ノゲ○ラ」

「ナオヤは何探しているのかしら？」

突然、僕の自室に聞き覚えのある女性の声が響く。

それは当然霊夢なのだが、その片手には僕の宝物が握られていた。

「… 霊夢？その右手に丸められて持っている328ページに及ぶライトノベルはなに？」

「ああ、これ？なんかナオヤの部屋に置いてあったからゴキ○リを駆除する為の道具にしたんだけど…」

「使用済み？」

「いや、まだよ」

内心の底から安堵しながらも、表情を崩さずそのままの顔でそれの危機的状況からの救出に試みる。

「ねえ、霊夢。それかえ「いたアー!!」なにがだよ!!」

叫ぶ霊夢の視線の先には、黒い甲殻類の害虫がいた。

ああ、なるほど。そーいうわけかあ。と理解しながら僕も叫ぶ。

「黒い甲殻類の害虫がア!!」

黒い甲殻類の害虫ごときに、ぼくの宝物を使わせるものか、と殺

意に満ちた目と気迫ですぐそこにあった新聞を丸めて、加速する。

それは、一瞬で霊夢を追い越し、ゴキの走る廊下に出た。

「見つけたぞー！」

ゴキを捕捉すると、速度をもう一段階上げてゴキを、追い越す。

しかし、ゴキには大きく叩かれた跡があり、そのままゴキだけが廊下の奥地へと吹っ飛んだ。

「いつ叩いたのナオヤ、ってあれ？」

「いやー良かった良かった無事でよかった」

霊夢は右手にあったはずの得物がなく、ツグナイの両手に大事そうに収められていた。

「つてことがあったのよ」

「へえ、あのツグナイがか？」

ゴキを退治したあと、霊夢は魔理沙の家に訪れていた。そこで霊夢は今日起きた事を笑い話にして、お茶を濁していたのだが。

そこでも悲劇が起きる。

「なあ霊夢今日の夜も『バゴン!!』な、なんだ!!」

魔理沙が霊夢に夜またただ飯を食いに行つていいか聞こうとした時、何か物が潰れ壊れる音が響いた。

魔理沙のすぐ隣にあったはずの机が、一瞬で潰れ果て、その中心には手のひらサイズの小石があった。

ちなみに、天井を貫通して侵入したので、少し大きめの穴があったが、後々密かにツグナイが直しに行った。

そんな一連の現象を目の当たりにした2人は…

「……話題を変えましょう」

「…(こくこくこくこく) (激しく肯定)」

後に『正確無比の小石の狙撃手』という二つ名が出来上がるのは、また後のこと。



「あなたは どうして自殺しようとするの?」

「どうしてってそれは、自分が嫌いだからだよ」

「ああ、夢か」

カーテンから漏れる日の光、俺の上でぐちゃぐちゃになっている毛布。

それが俺の、ツグナイナオヤの朝の状態だった。

体を起こして伸びをして、布団から出てまず水を飲む。

「ああ、水っていいなあ」

そんな一言を放ち、朝食である菓子パンを食べる。そして、現在時刻を確認する。

「えーっと、現在7時30分か、うん普通にヤバいな」

現在の時間を見て爽やかに現実から思考を反らした。

そんななかで、普通に制服に着替えて、鞆を持ち、ドアを開けて  
一歩を踏み出「あ、鍵忘れてた」せなかった。

「なんかg d g dな1日になりそうだなあ」

まったくもってそうだ。

ツグナイナオヤ17歳はそう思った。

今日から高校一年生になる俺は、悲しいことに色々な不安要素があった。

そんなことを胸に今日から通う玻阿（はあん）高校に足を進ませる。

校門をくぐりそして、

「うわああああああ!!」

下に落ちた。

無数の目がある空間から、青い空へ。

まあ、簡単に言うとは

「死亡確定スカイダイビングってふざけんなああー!!」

これが俺の、二度目の幻想入りだった。

そして、死にたがり少年の復活だった。

「私はここにいる。だからお願い、また来て。また来るときは報  
われててね」

「ああ、わかった。また来るときは、」  
「じゃあね、ヒガン。」

### 第三章 第二話 「サッカーと銃それに」

「さて、まず今いる場所から把握しよう」

あの絶望のスカイダイビングが終わり、なぜか死なずにいる俺ことツグナイ君は現在謎の森にいた。

あの後、一応グシャっといやなおとがしたが少し気絶しただけだった。打ち所がよかったのか？

「まあ、まずはこの森を抜けよう」

この草木が生い茂る謎のキノコ群がある森から脱出しよう。ということ、なんのあてもないまま行動することに。

すると、

バアンツツ！

「ツツ！」

「おおっとそれを避けたあ、すごいねえ」

謎の拳銃男A現れた。

拳銃男Aはこちらに銃口をむけたままニヤニヤと笑っていた。

ああイライラするわー、とか少々思いながらどうしようか考える。

素手で挑むわけにもいかないし、ここは

「なあ、素手相手に拳銃かよ。ここは対等にいこうぜおい」

俺は挑発をする。なに困難なことではない、ただ相手をおちよくるだけのシンプルなやり方。

すると、相手はこめかみに力を入れて怒鳴るように言う。

「ああそうだなあ!!ホラよ、これでいいだろ！」

沸点低いなあ。

まあ、結果オーライだ。

投げ捨てられたナイフを手取る。

そのナイフを右手で持ち、自然体で待ち構える。

「それじゃあ、死さらせえガキ!!」

男は拳銃を構えたままだったので、そのまま引き金を引く。ばあんと重い銃声がなりひびく。

しかし、それより先にツグナイ倒れていた。

そう、自分の左手首を切って血液を吹き出させながらたおれたのだった。

「はあ!?なんだこいつ自殺しやがったぞ」

驚いた表情を見せながら、こちらへ歩いてよってくる拳銃男A。そりやそうだろう、自分が殺す前に自殺してしまったのだから。

拳銃男Aは俺のことを見下すように嘲笑う。

「くははは!!なんだあひでえざまあだ。自殺するために俺のことを挑発してナイフとるたあお前最高だあ!!」

抱腹絶倒する拳銃男A。

ああ、うるせえなあ。

だから、こういう系の人は嫌いなんだよなあ。さて、まあ、とにかくやることは一つなわけだが。

「ふふふふはあ!?!」

「死亡フラグ生成中のとこすまないが、回収の時間だ」

拳銃男Aは地面にたおれ込んでいて、俺は立っている。

やることは一つ

「サッカーボールの刑だ」

ゴールのないサッカーボール（拳銃男A）を蹴り飛ばす俺。

サッカーボール（拳銃男A）は回転がかかりながら低空飛行で飛んで行く。

それを背景に俺はその地を去っていった。

ダツシユで。

「ヤバイヤバイヤバイ、銃刀法違反者と会っちゃったよ。ガチでどうしよう。そうだポリスメン、は居そうにないし」

人生発の銃攻撃にドキドキしている俺。

自分の能力『自殺行為で力を増幅させる程度の能力』を応用した技。その名も『殺し違い』は、俺は自殺するとほんの数秒間無敵時間が存在する。その数秒間に相手の即死攻撃を当てるというミニチート技なのだが。

「副作用として、そのこの部位の感覚が数時間無くなるんだよなあ」  
自分の弱い所を呟きながら、今も走っている。

そもそも、俺は平和主義者なのになんで、こういういろんなことが起きるかなあ、中学校でも不良に絡まれたりとか不運過ぎるだろう。しかも、人とは違って幼い頃の記憶がないって不運にも程があるだろう。

そんなことを心のなかで愚痴っていると、ひらけた所に出た。

そこには長い階段があった。

そして、そこから別れるように整地された道が続いていた。

「整地された道があるってことは、他にも人がいるってことか」  
拳銃男Aのような野蛮なやつじゃなければいいや。

俺は長い石階段を上りはじめる。

数分後、石階段の頂上に到達した。

そこには、神社があった。

鳥居には『博麗神社』という看板的なやつが立て掛けられており、その先にある神社には前には大きな鈴（鳴らすあれ）と賽銭箱があるだけだった。

「誰かいますかー。迷子になったんですけどー」

高一になって迷子かあ。とか思ったりした。

しかし、呼んでも返事がないということはいないと解釈している。

これからのことについてを考える。

「さて、どうしたもんかな」

すると後ろで足音が聞こえる。

振りかえると、紅と白の変な巫女服姿の少女がいた。

「あら、人が来るなんて珍しいわね。参拝客かしら」

「いや、違います。ここで迷子になっちゃって」

「私は博麗霊夢よ。ここで、巫女をやっているわ」

少女は平然として言った。

相手から自己紹介をしてきたから、こちらも自己紹介をすることにした。



「俺はツグナイオヤ。ただの高校生だ、ってどうした？」  
少女はなぜか驚いたような顔をして硬直している。

「ツグナイ、ってまさか。あなた、戻ってきたの？」

少女が言った言葉は、あたかも俺が前ここに来たことがあるような口調だった。

「ねえ、彼が戻って来た気がするの」

「ああツグナイがか。それはないんじゃないか。外の世界からはこちらへは干渉できないって紫が言ってたし」

「そうだよね。でもツグナイは戻って来るって言ってたし、今は信じて待つよ」

「ああ、そうしな。ヒガン」

### 第三章 第三話 「霊夢とスキマ」

「ツグナイって、まさか戻って来たの…？」  
少女は俺の名前を聞くと、驚いたまま固まった。

その言葉はあたかも前にここへ来たことがあるかのような口調で、当然俺はここに来た記憶すらない。

「…あの、人違いでは？」

「いや、そんな名前そうそういないわよ。それに、あなた能力があるわよね。たしか、『自殺行為で能力を増幅させる程度の能力』だったかしら」

うわあ、1字一句間違っただけよ。

たしかに、俺が小さい頃の記憶が無い事になるかもしれないが。記憶を消す理由が分からない。いや、それか記憶を消すしかなかったのかもしれない。

頭の中でいろんな事が飛び交う中、霊夢が近づいてきた。

そして霊夢が俺の前まできて、頬を叩く。

「うお!!」

「あなたって、1度考え始めると周りが見えなくなるタイプよね」

「すいません」

霊夢はそのまま俺を通り過ぎた。

「あとは、中で話しましょう。あと、」

霊夢は少し言葉を区切り言った。

「敬語は禁止よ」

妙にその言葉が懐かしかった。

「学校?」の登校中に変な空間に落ちて、幻想郷の空に紐無しバンジーした挙句に、変な男と遭遇して1回死んだが相手をサツカーボールにした後ここに至ったという訳ね。…なんか、災難だったわね」

「どうも」

博麗神社の中の居間でちやぶ台を挟んで話していた。

霊夢は幼少期の俺を知っているらしく、この「幻想郷」という魑

魅魍魎の湧く世界に来たことがあるらしい。

それを知ったところで俺の8歳までの記憶は戻らないし、今の目的は変わらない。

「それでさ、俺を元の世界に戻せるか？」

「……やっぱりそうなるわよね。まあ、できるわよ」

この言葉を聞いて体中が歓喜した。危うく人の家でガッツポーズをとるところだった。

「じゃあ今すぐいで」「却下よ」「はあ!？」

「却下よ、却下。いやよ、めんどくさい」

「めんどくさいって…」

その言葉のおかげで頭に血が上るのを感じた。

ちやぶ台をバンツ!!と叩いて怒鳴る。

「こっちは大事な高校の入学式の日だったんだぞ!!そんな大事な事をめんどくさいって…」

「言い方が悪かったわね。『できないわ』私はやってもいいけど邪魔が入るわよ」

「はあ?なんで俺が元の世界に帰るだけで、邪魔が入るんだよ」

今度は意味不明な事を言われて、頭に上った血が下っていくのを感じる。

だめだ、こいつに完全にペースを掴まれている。

しかし、できないというのはどういうことだろう。やるのは霊夢だろうが、霊夢の調子でも悪いのかもしくは……。

「……なあ、霊夢」

「なに？」

「霊夢ってまさか頭良かったりする？」

「知らないわよ。勘がいいとは言われるけど」

「そうか、じゃあ俺を落とした犯人とかわかる？」

目の前の少女は少し驚いたような顔をする。だが、すぐに元の顔に戻り言い放った。

「知ってるわよ。てか、すぐそこにいるじゃないの」

「お邪魔してまーす」

「……………うわぁ」

霊夢が指を指したそこには、俺が落ちてきたときに見た変な空間から上半身を出している金髪美女がいました。

## 記念回

ただのはっちやけ回

2017年4月28日 自室

「いやーやつと一話できたー。さて、早速投稿するか」

やつと出来た「死にたがり少年と幻想郷」の記念すべき第一話。宿題もそっちのけで出来たお話を何度も読み返した作者。

そして、新規投稿画面で何十分か格闘の末、

「出来たああああ!!よし、よくやったぞ俺、すぐに次のお話に取りかかるぞ俺!!」

そんな勢いで次のお話に取りかかりました。

次の日には宿題を忘れて灰になつていても知らずに。

2017年4月30日 自室

「よし、すぐにできた。即投稿!!」

2日で出来たお話をすぐに投稿する作者。

自分は駄文だと知っていても、めげずに2日間がんばったのつた。

2日間二時間睡眠で。

その日は、ぐっすり眠れました。次の日の部活に遅刻するとも知らずにぐっすりと。

2017年5月3日 学校

「今日中に仕上げて投稿するつもりだよ」

「思ったんだけどさ、プロローグ長くね」

「だまれ子僧!!お前みたいなの、勘のいいガキきらいだ」

誰かさんに自分の小説のミスった点を突かれて、それをボケで返すという行動を起こす作者。

あとあと他の人にも言われるとも知らずに。

2017年5月3日 自室

「さーて、早くこの小説のプロログを終わらせないとなあ」  
早くこのプロログを終わらせるため、お話を書く作者。しかし、ここでもうわかっていたのだ。

プロログがあと一話続くということ。

そして、そのプロログのことをまた誰かさんに問い詰められることを。

2017年5月4日 自室

「もうここでプロログという悪夢を終わらせるんだ!!」

ここでプロログを終わらせると意気込む作者。

予定通りプロログはおわった。

最後の最後でばかをやるが。(プロログ第四話 悲しみと意外な最後のあとがき参照)

このあとも色々とかバカなことをしてかすが、それはまた後で。

ということ、来ましたはっちゃけ回。ひゃあツハアア!!

この時を待っていましたはい!!

たまにだっていいじゃないかって感じです。

まあたまにこんな回を出して感想やコメントを紹介もとい返信っぽいことをしていきたいと思います。

まあ、次のお話の繋ぎというか、解説的なものですね。

今回はテスト的なやつで次回から本格的にやっけていきまあすつ!

作者自身ここまでこれたのも皆様のおかげというか、まだ十話ですけどこれからも楽しくやっていきたいと思ってます。

さてしゃくが余ったな……………。

よし、誰かさんのことについて。

誰かさんは、現実にはいませんがキャラクターベースとなっていてる人はいます。

多分、これを今も読んでくれていると思いますが、今回はその人

に  
お  
礼  
を  
。

「いつもありがとな!!」

それでは今回はこれで

では!!

とーじよーじんぶつしよーかい (登場人物紹介)

ver 2

○主人公

ツグナイヤオヤ 幼少期

父親に◆◆◆された後、◆◆◆に殺され幻想郷入りする。

最初は人里に住んでいたが、妖怪達の襲撃に会い、博麗の巫女に拾われ、博麗神社に住むことになる。

能力

自殺行為によって力を増幅させる程度の能力  
いわゆる、チート。

簡単に言うと、代償の度合いによつて無差別に筋力、霊力、妖力、神力、はたまた与える力をその代償の分1回に凝縮して出すことも可能であり、しかもほんの1秒だが無敵時間が存在する。

しかし、やることによつて◆◆◆が徐々に無くなり最終的には◆◆◆が◆◆◆◆らしい。

その他の情報

ツグナイの◆◆◆には、自称神様がいる。その神様の能力は揉み消す程度の能力であり、その能力でツグナイの◆◆◆◆を対処していた。しかし、ツグナイの◆◆◆う◆◆◆量はあまりにも多いため、対処し切れていない。

もし、それが対処を怠ればツグナイの人格が崩壊、もしくはもうひとつの人格が出来る。

ちなみに、神様がいつからいるのは不明らしい

博麗の巫女さんのコメント

「あの子は、歩いているだけで不幸そうなオーラを出していて、一目見ただけでナオヤだって分かるぐらいに」

普通の魔法使いさんからのコメント



「あいつは家事全般は出来るし、飯も上手いしでほぼ完璧なんだが、すこし自己犠牲が過ぎる気がする」

もんぺの蓬莱人さんからのコメント

「あいつは人助けには向いているが、人に頼る事には向いていない性格だ」

ツグナイナオヤ 青年期

普通の平凡な元高校1年生。

頭は悪くもなく良くもなく、いわゆる the 普通な感じで、性格は少しコミュ力が足りないだけで歪んではないが、大切な物を傷つけられたり、盾にされたりすると、周りが見えなくなる。まるで、幼少期の時の本人みたいだ。

本人の幼少期の時の記憶が消えており、一時期行方不明になっていたらしい、それに両親ともに一切の情報がなく、この世界に居たかすら分からないぐらいに情報がない。

なので、中学を卒業するまで唯一両親を知っていた人の家に住んでいたらしい。

高校に入学すると同時に1人暮らしをし始め、入学式の日にたまたま幻想入りをした。

能力

自殺行為によって力を増幅させる程度の能力

上記と同じ。

紫のスキマのお姉さんのコメント

「家事はあの紅魔館のメイド並だし、戦闘能力も人間なのか分からないぐらいに強いし、こっち側に引き込みたいわ。たぶん無理だけれど」

自称健全教師さんからのコメント

「彼は分からないことをそのままにするのではなく、ちゃんと分かるようにする。まるで、生徒の鏡だな。だが、少し自分を低く見すぎて

いるな」

博麗の巫女さんからのコメント

「…ノーコメント」

まだ彼の情報が足りない、引き続き情報収集に務める。

—ツグナイナオト—

## 死にたがり少年と幻想卿（リメイク版）

楽しいと思える日々が羨ましかった。

そんな日々が俺にも無かったか、なんて言われたらあったかもしれないし、無かったのかもしれない。前を知らない俺には、前ではなくあつてもなくてもどうでもいいものだ。

周りを見れば幸福そうな顔のやつらがいて、鏡を見れば不幸そうな自分の顔があつた。幸福そうな奴らを潰したくなって、最終的にはそんな事を考えていた自分を呪つた。

そんな毎日を通ぐすのは、とてもとても苦しくて、自分が自分の首を絞めているかのように錯覚する。

しかし、それはたかが錯覚だ。実際に死ねない。それでも苦ししいには変わりない。

そんな自問自答な日々を過ごしています。

「はあ、学校いきたくねえなあ」

まさに学校に通う少年の定型文を、自宅への帰り道で堂々と呟く。そりやそうだろう、本気で思っているのだから。

こういうものを考えていると、学校の存在意義を深く考えたいなる。事実、勉強ではなくふざけることに力を入れている学生が多いのが俺の通っている高校だ。それを見て見ぬ振りをする先生も先生だ。

そんな学校で勉強をしたくなるか？ならないだろう。

「・・・はあ、学校いきたくねえ」

二回目だ。

そんなふざけた事を、夕日を背景に思考する。

自問自答を繰り返し、冴えない頭で出ない答えを出そうとする。

そんな、ある種自殺行為じみた思考回路を持って、一度自分の存在を確認する。

俺はツグナイナオヤだ。俺はツグナイナオヤだ。俺はツグナイナオヤだ。俺はツグナイナオヤだ。……

まだ生きている。

ああ、まだ生きている。ツグナイナオヤは今もこの世界に存在している。

「… おっと、着いたか」

赤い屋根の二階建ての横長いアパートが目の前に現れる。

自分の部屋である402号室に足を向ける。階段を登り、102, 202, 302と俺の横を流れていく。そして402の数字が目の前に止まる。扉は黒く周りが白いコンクリートの壁だ。あんま俺は好きな配色じゃない。

「ただいまー」

自分以外誰も住んでいない部屋の扉を、ギギギイと音立てて開ける。

とにかく飯を食ってお風呂に入って歯磨きして寝る事を頭に再認識させる。

部屋に入って素足でリビングに入る。

この後予定通り食って入って磨いて寝た。

しかしそのまた後はどうだろう。

「何処だこ…」

よくある異世界モノのラノベよろしく、起きたら知らない森で横たわっていた。しかも、学ラン姿で。何故学ランなのかはわからないが、俺の通っている高校の制服は学ランで、その学ランには土に横たわったせいで土で汚れている。

「… とにかく移動しないとわからないな」

学ランに付いている土をバサバサつとある程度払い落としました着る。

俺は完全に当てもなく歩き始める。

周りを見ると見たこともないキノコや花があり、湿った空気が周りを満たしている。ざくざくざくと運動靴を履いた足で土を踏み

つける音と他に、湿った風が木を揺らしていた。

暗く不気味な雰囲気森を歩いてみると、正面が明るくなった。

「うツ…！」

今まで暗い所で目が慣れてしまったせいで、いきなりの光に唖る。

少し歩いて行くと、ひらけた場所に出た。

そこには、

「綺麗だな…」

紅い花咲き誇る、美しい一本道に出た。

ああ、ここは何処なのだろうか。こんな綺麗な風景が或る場所はなんとこの所なのだろうか。

「こんにちは、お兄さん。自殺してきたのかい」

風景に見惚れていると、横から女性の声が出た。

振り向くと、そこには赤い髪をツインテールにした高身長的女性が居た。

「あんた自殺志願者の一人かい？全く、せつかく受けた生を無駄にするなんて、ほんと世も末だねえ」

「ちよつと待て。誰が自殺志願者って言ったんだ。俺はまだ生きていたい一般学生だ」

「ん？じゃあなんでここにきたんだい？」

「すまないが、ここは何処なんだ？起きたらここに居たんだが…」

ああ…なるほど、と頷く女性。

「そうか、あんたは招かれた側か…」  
ご愁傷さまだね」

「いや何言ってるのかわからないんだが」

「博麗の巫女がやるようなことだけど…」

「ようこそ幻想郷へ。私は小野塚小町、しがたい死神だ」

「どうやらここは、別の世界らしい。」

